

# 琉球大学学術リポジトリ

## 復帰不安の研究 2 : その復帰後10年の変遷

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2007-09-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 名城, 嗣明, 東江, 康治, 東江, 平之, 中村, 完, 富永, 大介, 島袋, 恒男, Nashiro, Shimei, Agarie, Yasuharu, Agarie, Nariyuki, Nakamura, Tamotsu, Tominaga, Daisuke, Shimabukuro, Tsuneo メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/1945">http://hdl.handle.net/20.500.12000/1945</a>

# 復帰不安の研究 II<sup>(1)</sup>

——その復帰後 10 年の変遷——

名城 嗣明・東江 康治・東江 平之  
中村 完・富永 大介・島袋 恒男

## A STUDY OF THE REVERSION ANXIETY II: CHANGES OVER THE DECADE AFTER THE REVERSION

Shimei NASHIRO\*, Yasuharu AGARIE\*,  
Nariyuki AGARIE\*\*, Tamotsu NAKAMURA\*\*,  
Daisuke TOMINAGA\*\*\*, Tsuneo SHIMABUKURO\*\*

### I はじめに

この研究は、沖縄の施政権返還を間近に控えた 1972 年春に実施された、いわゆる復帰不安に関する調査研究（与那嶺松助，他，1981）を，10 年経過した時点で再び実施し，復帰後の沖縄の社会でおきた変化の諸相を，住民の意識の変化を通してとらえ，その意味を検討することを目的とする。調査結果の一部は既に要約して発表された（東江平之，他，1983<sup>(2)</sup>）が，本稿は資料の分析をさらに深めたものである。

復帰の意味はいろいろな角度から検討することが可能であるが，ここでは社会心理学の立場から，それをどう住民が受けとめているか，またはどう評価しているか，を中心に検討していくことになる。住民の意識を通して復帰をとらえるということは，復帰を意識の問題としてとらえることを意

味する。そこでは復帰を一つのトータルな状況として扱うこともできるが，より分析的な比較・検討ができるようにするために，前回の調査の場合と同様，戦争不安，自治不安，人権不安の 3 種類の不安を復帰不安の主軸として設定することにした。

戦争不安とは，平たく言えば，再び戦争に巻き込まれるのではないかという不安である。熾烈を極めた地上戦に巻き込まれ，筆舌に尽くし難い経験を強いられた沖縄県民にとって，何事にせよ，それが戦争への道につながるか否かを問うことは，最も重要な価値尺度の一つであるといえる。した

(1) 本研究は昭和 57 年度特定研究『復帰 10 年の沖縄の教育と社会』（代表 名城嗣明）琉球大学教育学部，の一部である。調査の実施に当っては，辺土名，名護，読谷，諸見，城西，久茂地，糸満，知念，清水，平良第一，登野城の県下 11 の小学校の関係者の協力を得た。データの電算処理に当っては大城宣武氏（沖縄キリスト教短期大学助教授）の協力を得た。記して感謝の意を各位に表したい。

(2) 東江平之，中村完，富永大介，1983，復帰不安の追跡：～復帰 10 年の沖縄の社会で～，『復帰 10 年の沖縄の教育と社会』，琉球大学教育学部発行（名城嗣明代表）82～100。

\* Dept. of Educ. Psychol., Coll. of Educ.,  
Univ. of the Ryukyus

\*\* Dept. of Sociol., Coll. of Law & Litt.,  
Univ. of the Ryukyus

\*\*\* Coll. of General Educ., Univ. of the  
Ryukyus

がって、戦争不安の測定によって復帰を評価しようとする試みは、復帰の評価を、その最も根元的な次元で求めたものであるといえよう。また、住民の戦争不安がけっして根拠のない感情ではないことは、言うまでもないことである。前述のように、郷土を戦場と化す経験を強いられただけでなく、今なお国内の米軍基地の53%を抱えさせられていて、それは、全国土のわずか0.6%に過ぎない狭い県土面積を考慮に入れると、実に全国平均のほぼ187倍の負担ということになる。自衛隊施設面積を含めても、軍事施設面積の合計は259.55㎏となり、それは全国面積の17.3%に相当し、沖縄県民は全国平均の34倍以上の負担を強いられていることになる<sup>(3)</sup>。当然のことながら、基地に起因する事故等が跡を絶たず、基地の脅威を可視化している。このような状況の下でとらえられる戦争不安は、単なる意識の問題ではなく、重大な現実の指標と見なせるものであり、復帰不安の主要な軸として位置づけるべきものであろう。

第2軸の自治不安とは、自分の生き方を、どこまで自分で決めることができるか、という問題をめぐる不安である。逆に見ると、このような自決権が、多数派の都合や国際外交の力学等によって、将来どこまで制約を受けるのか、という、いわば、制御不能事態の予測である。沖縄の文化はどうか、沖縄人としてのアイデンティティは、果たして失われずにすむのだろうか、という不安なども当然含まれると見てよい。顧みれば、近代史の中で沖縄の帰属問題は幾度か他者によって決定された事実があるばかりでなく、いわゆる皇民化教育や同化政策によって沖縄固有の文化にある種の荒廃現象が起こったことも事実である。それどころか、これらの自治への脅威は今なお構造的に潜在していると見るべきであらう。したがって、自治不安もまた、沖縄県民の個性または存在証明にかかわる次元の問題であり、無論、無視することのできないものである。

最後に、ここでいう人権不安とは、沖縄の社会の中で、その伝統文化につつまれ、沖縄人らしく生きていく権利が、あるいは日本国民として憲法

の保障の下で生きていく権利が、さらにまた、普遍的に認められた人間としての権利または尊厳が、何らかの形で侵害されるのではないかとする不安のことを意味する。具体例としては、就職や結婚における差別に対する不安または苛立ちがあげられる。その他にも、沖縄に住んでいても、必要にして適正な教育が平等に受けられるかどうか、方言または沖縄アクセントで話しても肩身の狭い思いをしないですむかどうか等、いわば沖縄の人々が自然の姿のままに生きられるか、それともそこには何らかの制約または抵抗があるのか、などの不安が挙げられる。沖縄らしさを、たとえそれがどんなものであれ、除去または抑制しなければならないとすれば、それは沖縄の人々にとって、人権への侵害以外の何ものでもない。

以上の通り復帰不安を3つの種類に分けてとらえることにしたが、いずれも人間らしい生き方にとって不可欠であり、かりにも復帰によっていずれか一つにでも影をおとすのであれば、それは復帰の意味をいま一度問い直すことを求めるのではなからうか。

さて、本調査研究においては、上記3種類の不安を、政治、経済、文化、社会の4領域でとらえることにした。さらに不安の対象として日本、米国、沖縄の3つを設定することにした。例えば、「……自衛隊が沖縄に配備されたために、かえって戦争の危険性が高まったと思いませんか」という設問は、戦争不安、政治の領域、日本という対象の3つに関係しているため、3つの角度から分析されることになる。各質問項目には、不安の種類、領域、対象という3つの側面があると言える。見方を変えると、ここで扱われる復帰不安は、 $3 \times 4 \times 3 = 36$ 、すなわち合計36のカテゴリーに及ぶということになる。復帰後10年の間にこれらの不安はどう変わったか。またこれらの変化は復帰後の沖縄の社会の変容とどう関連するのか等を検討するのが本研究の目的である。

## II 方法

### 1) 調査の対象

調査の対象者は原則として成人男女とした。対象者の調査地点別、性別、年齢別、学歴別、職業別、支持政党別構成は表1～6に示された通りである。

(3) 沖縄県企画調整室、1981(昭和56年3月)「沖縄県勢のあらまし」

表1 調査地点と対象者数（那覇のみ2校，他は各1小学校区）

調査地点	1 国頭	2 名護	3 読谷	4 コザ	5 那覇	6 知念	7 糸満	8 宮古	9 八重山	10 久米島	0 不明	全体
人数(%)	37 (4.0)	73 (7.9)	88 (9.5)	85 (9.2)	204 (22.1)	69 (7.5)	91 (9.9)	122 (13.2)	108 (11.7)	44 (4.8)	2 (0.2)	923 (100.0)

表2 性別人数と%

性別	M 男	F 女	0 不明	全体
人数(%)	412 (44.6)	459 (49.7)	52 (5.6)	923 (100.0)

表3 年齢構成

年齢	1 20歳未満	2 20～29	3 30～39	4 40～49	5 50～59	6 60～69	7 70～	0 不明	全体
人数(%)	14 (1.5)	31 (3.4)	343 (37.2)	427 (46.3)	54 (5.9)	7 (0.8)	3 (0.3)	44 (4.8)	923 (100.0)

表4 学歴構成

最終学歴 (中退含)	1 小学	2 中学	3 旧・制高 中女	4 高校	5 旧専門 制学	6 短大	7 大学	8 その他	0 不明	全体
人数(%)	64 (6.9)	256 (27.6)	34 (3.7)	325 (35.2)	3 (0.3)	48 (5.2)	96 (10.4)	24 (2.6)	73 (7.9)	923 (100.0)

表5 職業構成

職業	1 農業	2 漁業	3 商業	4 工業	5 製造	6 建設	7 サービス	8 金融	9 会社員	10 基地	11 公務員	12 自由業	13 その他	0 不明	全体
人数(%)	48 (5.2)	20 (2.2)	101 (10.9)	7 (0.8)	16 (1.7)	69 (7.5)	81 (8.8)	6 (0.7)	111 (12.0)	10 (1.1)	151 (16.4)	41 (4.4)	186 (20.2)	76 (8.2)	923 (100.0)

表6 支持政党別構成

支持政党	1 自民	2 社大	3 社会	4 共産	5 公明	6 民社	7 新自由	8 社民連	9 答れ えない	10 わな からい	11 その他	0 不明	全体
人数(%)	212 (23.0)	95 (10.3)	82 (8.9)	30 (3.3)	18 (2.0)	13 (1.4)	5 (0.5)	4 (0.4)	155 (16.8)	132 (14.3)	65 (7.0)	112 (12.1)	923 (100.0)

2) 調査実施の方法

調査地点の選定にあたっては、沖縄本島を北部、中部、南部に分け、各地域毎に代表的都市部と農村部の小学校各1校を選んだ。那覇は特別地域とし、旧那覇と首里から各1校を含めることにした。地域ブロック間の比較をする場合は、便宜上久米島を那覇の農村部として位置づけ、他ブロックとの比較の際できるだけバランスをとるよう努力した。宮古と八重山については各1校選定し、いずれも都市部の学校をもってあてた。

上記の通り選定された各小学校（いずれも中規模以上の学校）の5年生2～3学級を機械的に特定し、特定された学級に属する全児童の父母またはその他の成人家族を対象として、調査票留め置き法によって記入してもらった。調査票の配布及び回収は児童の協力を得て行ない、配布後2～3日以内で回収はほぼ完了した。調査対象は原則として同性の成人家族とするよう指定したが、不在

またはその他の理由でそれが不可能な場合は、異性に記入させることができるよう手配した。

3) 調査期間

調査実施の期間は1982年12月から翌年1月までの約1か月である。

4) 調査票

調査項目は付表に示す通りである。問題の表現は10年の時差を考慮して多少修正を要した。旧項目については与那嶺、他（1981）または東江、他（1983）を参照されたい。項目73のみは今回の調査票に新規に加えたものである。その他にも調査対象に関する基本事項9項目が含まれている。

上記72項目は表7の通り分類されている。同表に見られる通り、36カテゴリーの復帰不安の各々について2項目が設問されている。

表7 調査用紙の構成\*

不安の種類 不安の領域	1. 戦争不安			2. 自治不安			3. 人権不安		
	a) 対日本	b) 対沖縄	c) 対米国	a) 対日本	b) 対沖縄	c) 対米国	a) 対日本	b) 対沖縄	c) 対米国
A 政治	1	3	5	7	9	11	13	15	17
	2	4	6	8	10	12	14	16	18
B 経済	19	21	24	26	28	30	32	34	23**
	20	22	25	27	29	31	33	35	36
C 文化	37	39	41	43	45	47	49	51	53
	38	40	42	44	46	48	50	52	54
D 社会	55	57	59	61	63	65	67	69	71
	56	58	60	62	64	66	68	70	72

\* 表内の数字は調査用紙における出現順位ではなく問題の整理番号を表わす。

\*\* 問23は修正して分類替えした。

5) 結果の分析方法

結果は3つの部分に分けて分析されたが、第1部では沖縄の社会の現状を把握する目的でなされた。ここでは10年前の資料の分析に準じて処理された。

第2部では数量化理論Ⅲ類で処理し、復帰不安の潜在構造の把握を目ざした。第3部では復帰後10年間の社会不安の変化をとらえるよう努力した。

### Ⅲ 結果と考察

#### 1 復帰10年の沖縄の社会

##### 1) 不安の領域

##### (1) 政治

##### a 地域別比較

表8は、不安の対象をこみにして不安の領域別、不安の種類別に地域差を示したものである。各セル内に表記された数値の単位はパーセントを示し、左側が悲観（Pessimism）の、右側が楽観（Optimism）のパーセントを示している。また、（ ）内の数値は悲観値と楽観値の差（P-O差）を示しており、数値が大きいほど悲観的傾向が高く不

安感情の強いことを示している。悲観値と楽観値を加えても100%に達しないのは、回答肢の値が除外されているためである。尚、同様の手続による結果の分析および表示は、不安の対象、不安の種類を主とした分析でも実施されている。その際、不安の領域、不安の対象および不安の種類による同一クロス内で数値に若干の変動が見られるのは、四捨五入などの違いに基づく誤差である。

不安の領域別による地域差の検討は、各地域別に不安の領域の平均値による比較を主として実施し、必要に応じて不安の種類別に地域差について検討していくことにする。

表8 領域別、種類別不安の地域差（対象こみ）

領域 種類 反 対 心 な り 地 域	政治				経済				文化				社会																				
	戦争		自治		人権		平均		戦争		自治		人権		平均		戦争		自治		人権		平均										
	P	O	P	O	P	O	P	O	P	O	P	O	P	O	P	O	P	O	P	O	P	O	P	O									
北部	50	26	36	39	41	40	42	35	47	26	64	17	43	31	51	24	41	39	38	37	41	32	40	36	42	33	36	37	26	52	35	41	
	(24)		(-3)		(1)		(7)		(27)		(47)		(12)		(26)		(2)		(1)		(9)		(4)		(9)		(-1)		(-26)		(-6)		
中部	53	23	36	37	40	37	43	32	44	27	60	18	43	32	49	25	43	34	41	34	38	34	41	34	41	34	34	38	26	47	34	40	
	(30)		(-1)		(3)		(11)		(17)		(42)		(11)		(24)		(9)		(7)		(4)		(7)		(7)		(-4)		(-21)		(-6)		
那覇	44	31	36	39	37	43	39	38	46	28	59	21	43	32	49	27	43	37	41	34	37	36	40	36	40	35	34	40	26	51	34	42	
	(13)		(-3)		(-6)		(1)		(18)		(38)		(11)		(22)		(6)		(7)		(1)		(4)		(5)		(-6)		(-25)		(-8)		
南部	46	26	35	35	38	38	40	33	42	26	54	21	37	32	44	26	37	38	37	33	39	33	38	35	37	35	31	36	26	46	32	39	
	(20)		(0)		(0)		(7)		(16)		(33)		(5)		(18)		(-1)		(4)		(6)		(3)		(2)		(-5)		(-20)		(-7)		
宮古	49	25	36	40	38	42	41	36	51	24	60	19	46	29	52	24	42	37	44	29	45	26	44	31	43	32	35	35	32	45	36	37	
	(24)		(-4)		(-4)		(5)		(26)		(41)		(17)		(28)		(5)		(15)		(19)		(13)		(11)		(0)		(-13)		(-1)		
八重山	43	35	35	39	33	46	37	40	44	28	58	22	40	34	47	28	41	39	38	35	38	34	39	36	39	36	30	41	24	25	31	42	
	(13)		(-4)		(-13)		(-3)		(16)		(36)		(6)		(19)		(2)		(3)		(4)		(3)		(3)		(3)		(-11)		(-26)		(-11)

図1は、表8を基に政治領域における不安を不安の対象をこみにして地域差を示したものである。不安感情を表す悲観値の最も高い地域は、基地に隣接している中部（43%）であり、次いで北部（42%）の順となっている。特に両地区は、政治領域の中でも戦争不安において悲観的傾向が顕著に高いことを示している（中部53%、北部50%）。

このように中部、北部において悲観的傾向の高いのは、広大な米軍基地の存在や、頻繁に実施される軍事演習と無関係ではないと思われる。逆に悲観値の低い地域は、比較的基地公害の少ない八重山（37%）と那覇（38%）である。また、楽観値でも八重山（40%）、那覇（38%）は高い値を示し、政治的に悲観的傾向の低いことを裏づけてい

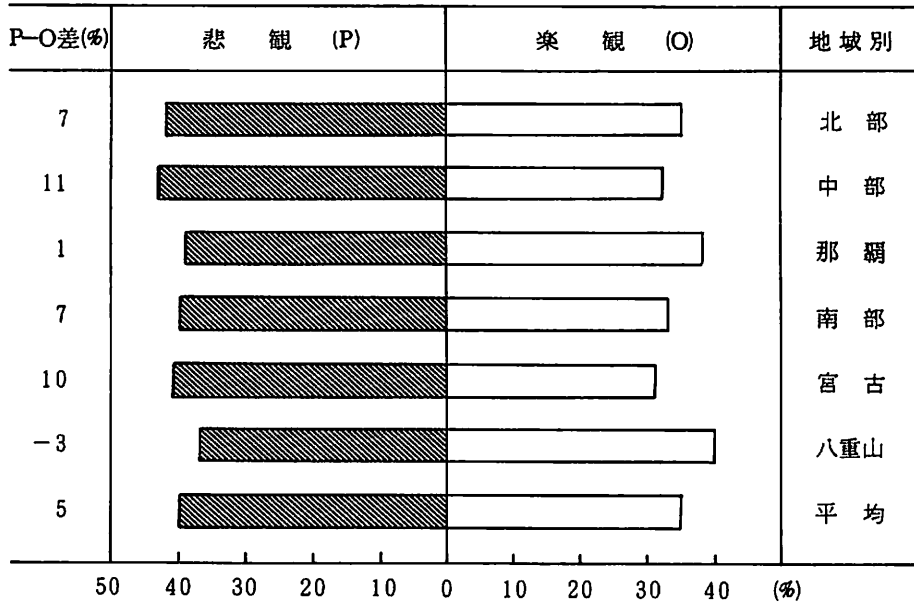


図1 政治領域における不安の地域差 (対象, 種類こみ)

る。そして、基地公害と無関係と思える宮古において、比較的悲観値が高く(41%)、かつ楽観値の低い(36%)のは、社会問題全般に対する関心・意識の高さをうかがわせている。

b 性別比較

表9は、不安の種類、不安の対象をこみにして不安の領域別に男女差を示したものである。尚、更に詳細に不安の領域別に加えて不安の種類別に見た男女差が表15の一部に示されている。領域別の男女差が顕著と言いが難いので性別比較においても、必要に応じて不安の種類別まで男女差を検討していくことにする。

図2は、政治領域における不安の男女差を示したものである。悲観値においては男女差が認められないが、男性の楽観値(40%)は女性の楽観値(33%)をかなり上回っている。また、P-O差では女性の値が高く、男性に比較して悲観的傾向の高いことを示している。しかし、女性のP-O差が高いのは回答肢Aを選択した人が多いということを反映しており、態度決定の困難性が女性の悲観的傾向を高める結果となっている。政治領域において不安の男女差が顕著とは言いが難いが、不安の種類別に検討すると男女差を認めることができる。すなわち、戦争不安では男性の悲観値(50%)が女性の悲観値(47%)を上回り、逆に、人

表9 領域別、性別にみた不安の比較 (対象, 種類こみ)

領域 反 カ テ ゴ リ	政治		経済		文化		社会	
	P	O	P	O	P	O	P	O
男性	41 (1)	40 (21)	51 (21)	30 (6)	43 (6)	37 (6)	36 (-8)	44 (-8)
女性	41 (8)	33 (8)	50 (26)	24 (6)	40 (6)	34 (6)	33 (-6)	39 (-6)
平均	41 (5)	36 (5)	50 (23)	27 (5)	41 (5)	36 (5)	34 (-7)	41 (-7)

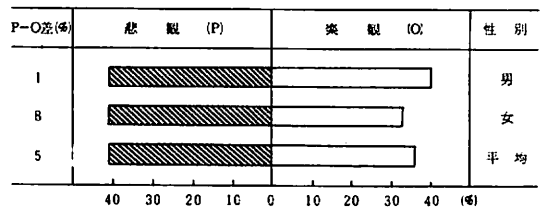


図2 政治領域における不安の性差 (対象, 種類こみ)

権不安では女性の悲観値(50%)が男性の悲観値(47%)を上回る結果を示している。人権不安の中でも、「沖縄の人々の基本的人権の主張」(項目15)において、女性の悲観的傾向が高いのが目

立っている。

(2) 経 済

a 地域別比較

図3は、不安の対象、不安の種類をこみにして経済領域における不安の地域差を示したものである。悲観値の最も高い地域は、宮古(52%)であり、次いで北部(51%)、中部(49%)、那覇(49%)の順になっているが顕著な差ではない。しかし、政治領域では楽観的傾向を示していた商業都

市那覇において悲観的傾向が高くなっている。逆に、悲観値の低い地域は南部(44%)、八重山(47%)の農村地域であり、P-O差でも同様の傾向を示している。更に、不安の種類別に地域差を検討したところ、社会的関心度の高さを反映して、宮古は戦争不安(51%)、人権不安(46%)において悲観値が高い。また、自治不安において北部の悲観値(64%)が顕著に高いのは、県内外からの企業進出に伴う社会変動に対する懸念と無関係ではないと思われる。

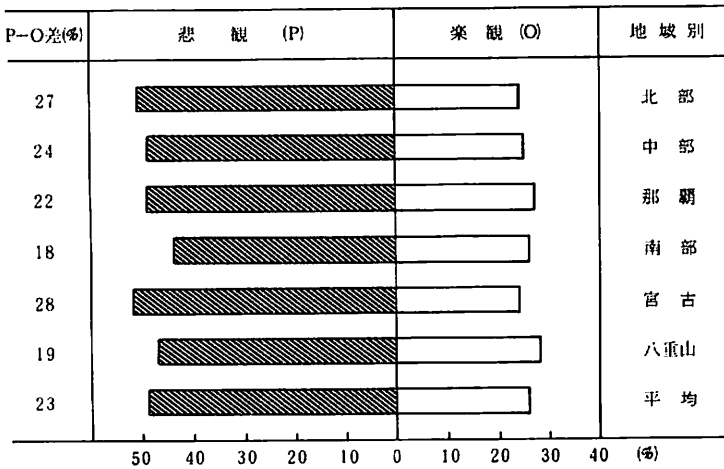


図3 経済領域における不安の地域差(対象,種類こみ)

b 性別比較

図4は、不安の対象、不安の種類をこみにして経済領域における不安の男女差を示したものである。政治領域と同様に悲観値での顕著な男女差は見られない。P-O差では女性の数値が高く悲観的であることを示しているが、この結果は女性において態度決定を避ける傾向の強いことを反映している。不安の種類別に男女差を検討したところ、戦争不安において男性の悲観値(50%)が女性の

悲観値(43%)をかなり上回り、沖縄をとり巻く経済-軍事情勢に対して男性の関心度が高く、かつ不安感情を形成していることがわかる。自治不安、人権不安においては悲観値に男女差は見られない。しかし、どの種類の不安においても女性の態度決定が困難であることを示しており、経済領域を中心とする社会問題に対して女性の関心度がそれほど高くないことを予測させている。

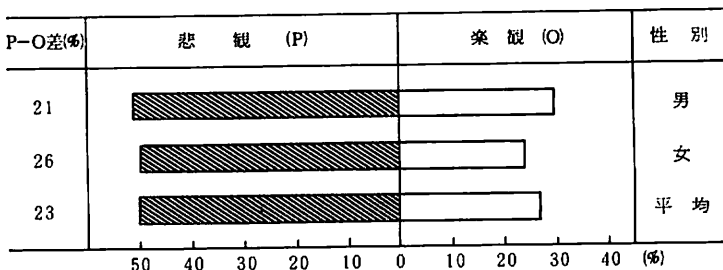


図4 経済領域における不安の性差(対象,種類こみ)



(3) 文化

a 地域別比較

図5は、不安の対象、不安の種類をこみにして文化領域における不安の地域差を示したものである。悲観値の最も高い地域は他の不安領域と同様に宮古(44%)であり、逆に、最も悲観値の低いのは南部(38%)である。残りの地域はそれほど差異を示していない。しかし、不安の種類別に地

域差を検討していくと、宮古は自治不安(44%)と人権不安(45%)において特に高い悲観値を、また、北部は人権不安(51%)において高い悲観値を示している。このように、都市部よりも農村地域において悲観的態度が見られるのは、本土-沖縄という対比における教育・文化に対する不安感情と無関係ではないと思われる。そして、中部において戦争不安における悲観値(43%)が高

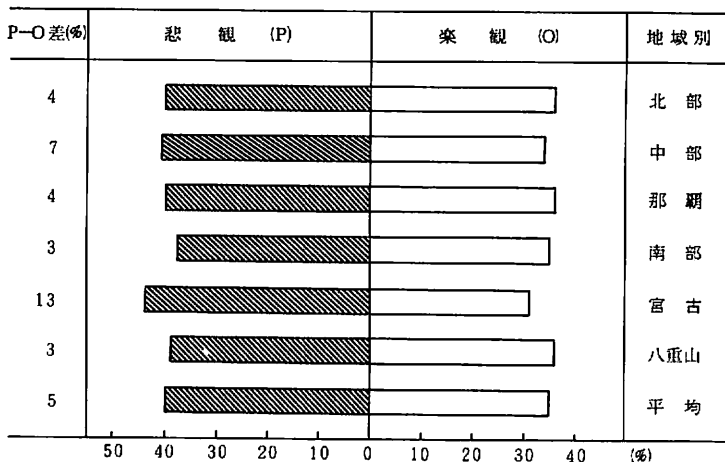


図5 文化領域における不安の地域差(対象,種類こみ)

いのは軍事情勢をめぐる社会の動きに関心が高いことを裏づけているものと思われる。また、文化領域において全体的に楽観的態度を示す南部は、戦争不安(37%)自治不安(37%)において特に悲観値が低いという結果を示している。

b 性別比較

文化領域における不安の男女差について図6を参照すると、悲観値(43% vs 40%)においても、また、楽観値(37% vs 34%)においても男性の値が高いことがわかる。すなわち、女性より男性の方が文化領域において態度を明確に表明している

ことを示している。不安の種類別に男女差を検討していくと、戦争不安と自治不安において、男性の悲観値(46%, 43%)が女性の悲観値(39%, 40%)を上回り、特に米国を対象とする戦争不安が男性に高いことを反映している。また、自治不安は日本を対象にした不安を反映しており、本土-沖縄という対比に基づく不安感情が男性において高いことを予測させている。しかし、人権不安においては男女差は見られないことから、上述の性差は社会問題に対する関心度における男女差を反映しているものと考えられる。

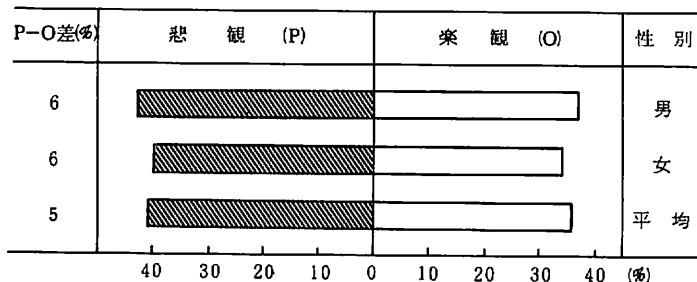


図6 文化領域における不安の性差(対象,種類こみ)

(4) 社 会

a 地域別比較

社会領域における不安は、すべての地域において悲観値が低く、楽観値が高いという結果を示し、他の不安領域よりも楽観的態度を示している(図7)。しかし、その中でもわずかながら不安の地域差を見ることができる。他の不安領域と同様に宮古は悲観値が最も高く(36%)、かつ、P-O差が高いという結果を示している。とりわけ、戦争不安(43%)、人権不安(35%)において宮古

の悲観値が顕著に高い。宮古とは対照的であるのが同じ先島地方の八重山であり、悲観値が最も低く(31%)、かつ、P-O差も低いという結果を示している。先島地方の対照的な結果に対して、本島では顕著な地域差を見出すのは困難である。しかし、他の不安領域と同様に、北部は戦争不安(42%)、自治不安(36%)において悲観値が高く、逆に、南部は戦争不安(37%)、自治不安(31%)において悲観値が低いという結果にある。

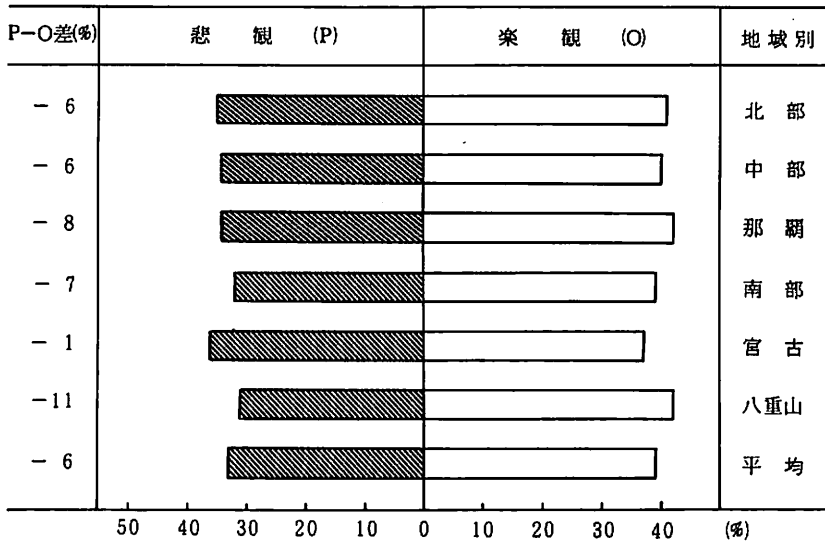


図7 社会領域における不安の地域差(対象,種類こみ)

b 性別比較

図8は、不安の対象,不安の種類をこみにして社会領域における不安の男女差を示したものである。他の不安領域と同様に男性の悲観値(36%)が女性の悲観値(33%)を上回り、楽観値でも同じく男性の値(44%)が女性の値(39%)を上回

る結果となっている。どの不安領域でも女性は明確な態度決定を避ける傾向が高いと言えよう。不安の種類別に男女差を検討しても上述の傾向が認められ、戦争不安,自治不安において男性の悲観値(44%, 37%)が女性の悲観値(39%, 33%)

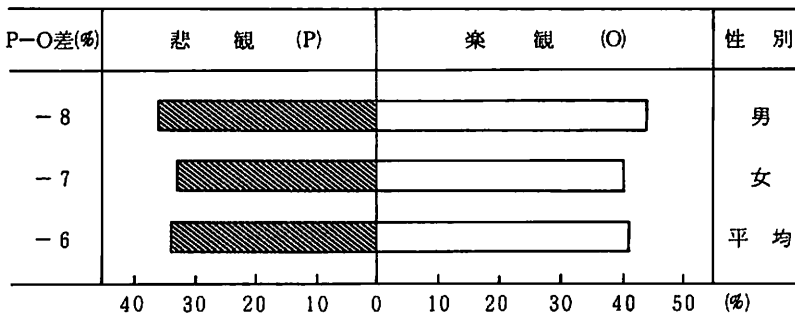


図8 社会領域における不安の性差(対象,種類こみ)

を上回り、また、男性の楽観値(37%, 42%)が女性の楽観値(34%, 37%)を上回っている。

2) 不安の対象

(1) 日本

a 学歴別比較

不安の種類、領域をすべてこみにして、日本に対する不安の程度を算出した図9によると、小、中、旧制中・高女、までは悲観値の割合がほとんど同程度であった。さらに、短、大と高学歴者層

のそれは大きくなり、日本に対して、低学歴・中学歴層よりも、悲観的であるといえる。楽観値の割合では学歴間に差が見られない。ここで注目すべきことは、旧制専門学では他の学歴層に比べて悲観値が非常に低い。P-O値は-29を示した。かれらの不安の態度について種類ごとに内訳を見ると、経済に関しては全く不安を感じていず、他の種類に関しても大変楽観的態度を持っていることがわかる。

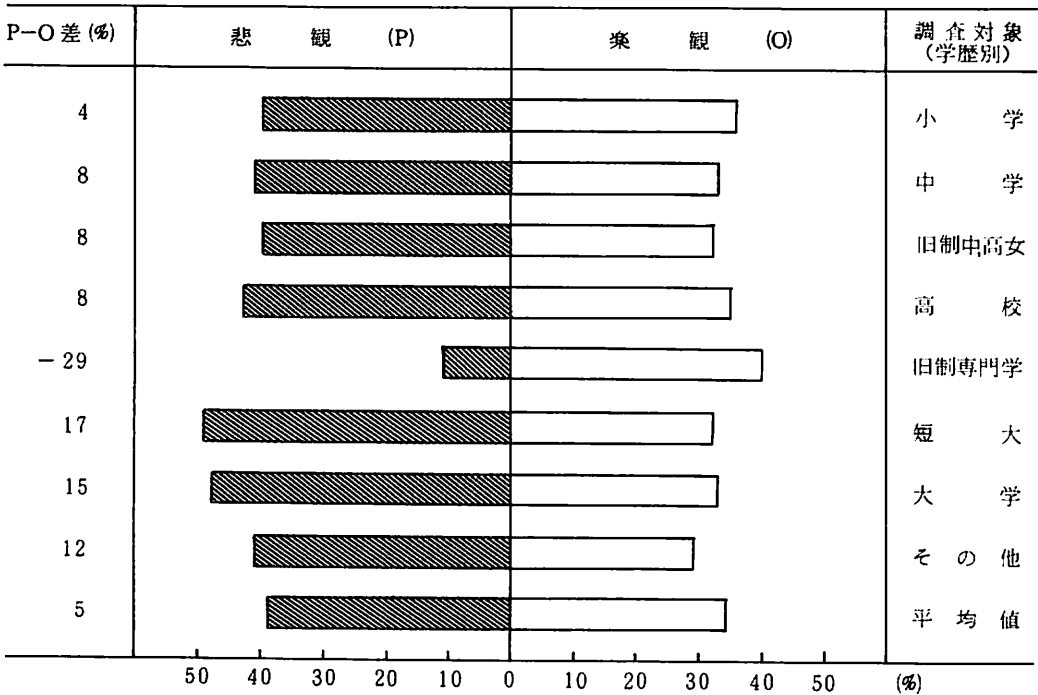


図9 日本に対する不安の学歴差(種類こみ)

b 職業別比較

前回の調査結果と比較する意味で、職業別に下記の7つのグループに分けて検討した。

- 農業・漁業(農・漁)
- 商業・会社員(商・会)
- 工業・製造業・建設業(工・製・建)
- 基地関係(基)
- 公務員・自由業(公・自)
- サービス・金融(サ・金)
- その他

図10を見ると、いずれの職業でもP-O値が正であり、悲観値の割合が楽観値より高い結果にあ

った。特に、悲観値が一番高い職業は基地関係であり、62%である。さらに、基地関係者は楽観値が21%であることから、彼等は一貫した悲観的態度を持っていることがうかがえる。

悲観値が次に高いのは公務員の51%であり、彼等の楽観値の割合も低い。次に、悲観値の高い職業は金融関係の48%であった。

しいて言えば、農・漁、商・会、工・製・建関係の職業でも悲観値の割合がやはり高い。しかし悲観値と楽観値の割合にはほとんど差が見られなかった。

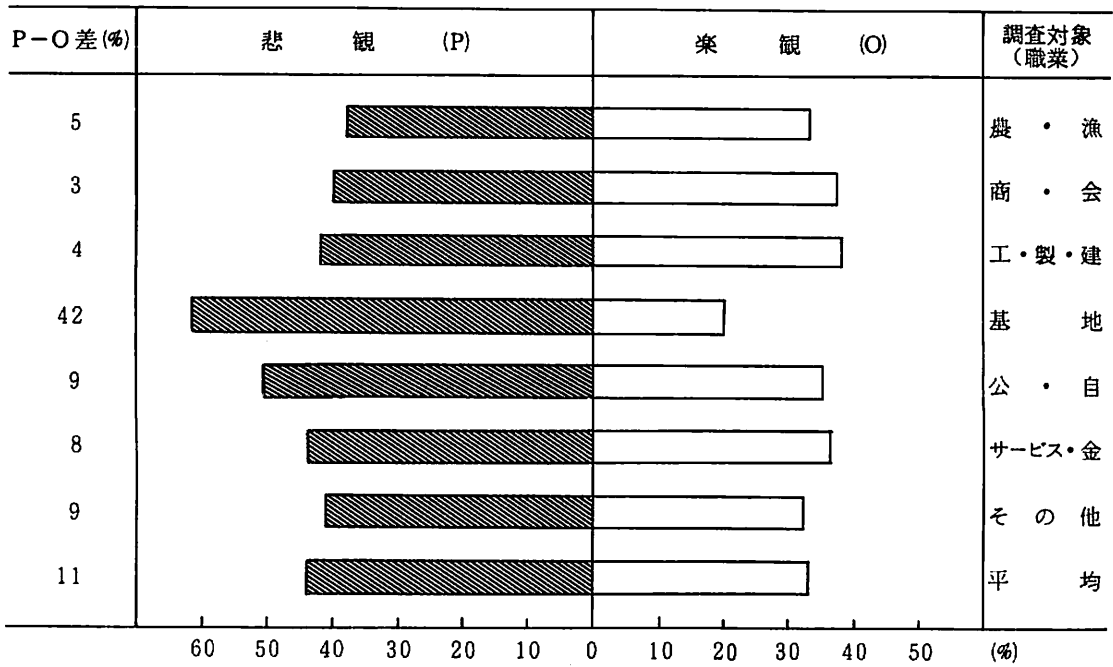


図 10 日本に対する不安の職業差 (種類こみ)

(2) 沖 縄

a 学歴別比較

図11を見ると、小、中、旧制中・高女、までは、ほとんど日本に対する態度と変わらないがP-O値はそれよりも大きい。沖縄に対しては日本に対するよりもいくぶん悲観的である。また、短・大

の学歴層の結果も対日本と同様であるが、若干悲観値が減少している。

一方、旧制専門のP-O値は対日本と同様にマイナスであるが、その値は小さくなっており、悲観値が増加している。

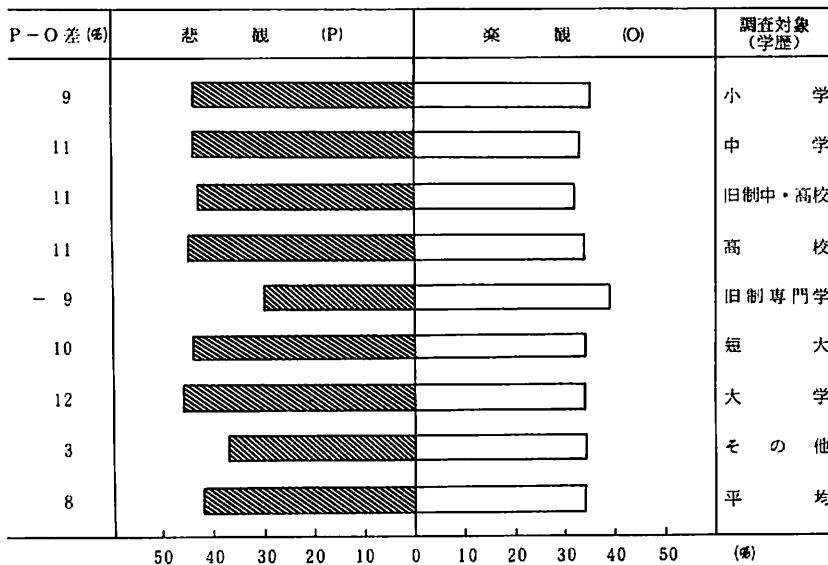


図 11 沖縄に対する不安の学歴差

b 職業別比較

図12を見ると、いずれの職業においても、P-O値が、プラスで悲観値が楽観値を勝っている。基地関係、公務員を除いた職業では対日本よりも

悲観値が高い。楽観値は変わらない。基地関係、公務員の悲観値の割合は対日本に比べて、僅かではあるが低い。

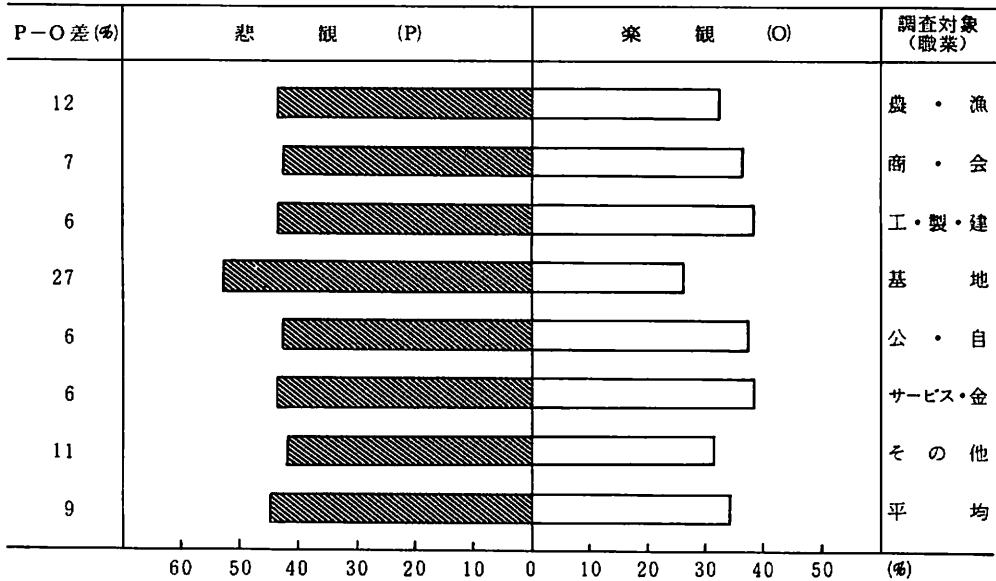


図12 沖縄に対する不安の職業差

(3) 米 国

a 学歴別比較

図13を見ると、大学を除いたいずれの学歴でも、対日本、対沖縄の結果と異なってP-O値はゼロかマイナスである。大学卒の者でも対日本、対沖

縄よりも悲観値は減少している。すなわち、悲観値と楽観値がほとんど同じである。

対米国に対する悲観値は対日本、対沖縄よりも低い。

旧制専門の悲観値は米国に対しても同様に少ない。

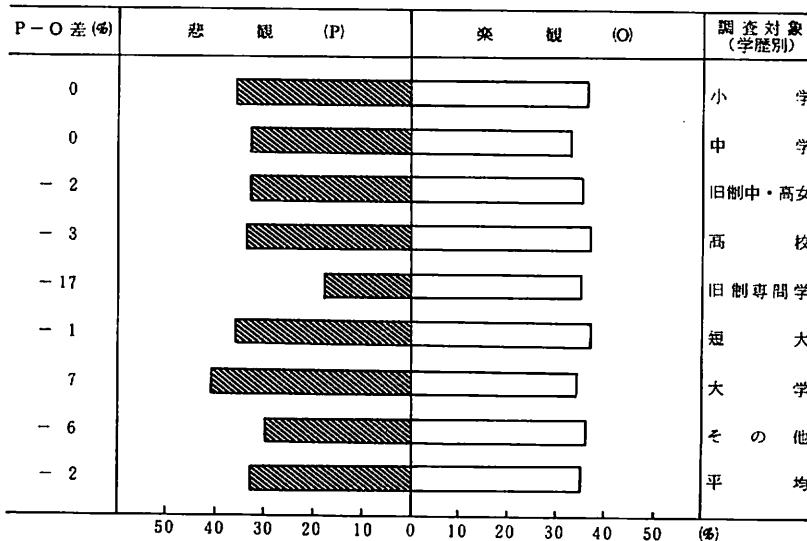


図13 米国に対する不安の学歴差

b 職業別比較

日本、沖縄に対してはどの職業でも、悲観値の割合が高かったが、図14のP-O値を見ると、対米国に対しては3つのグループの職業（商・会、

工・製・建、サ・金）で楽観値が悲観値より高い。しかし、基地関係は米国に対しても一貫して悲観的態度が強い。

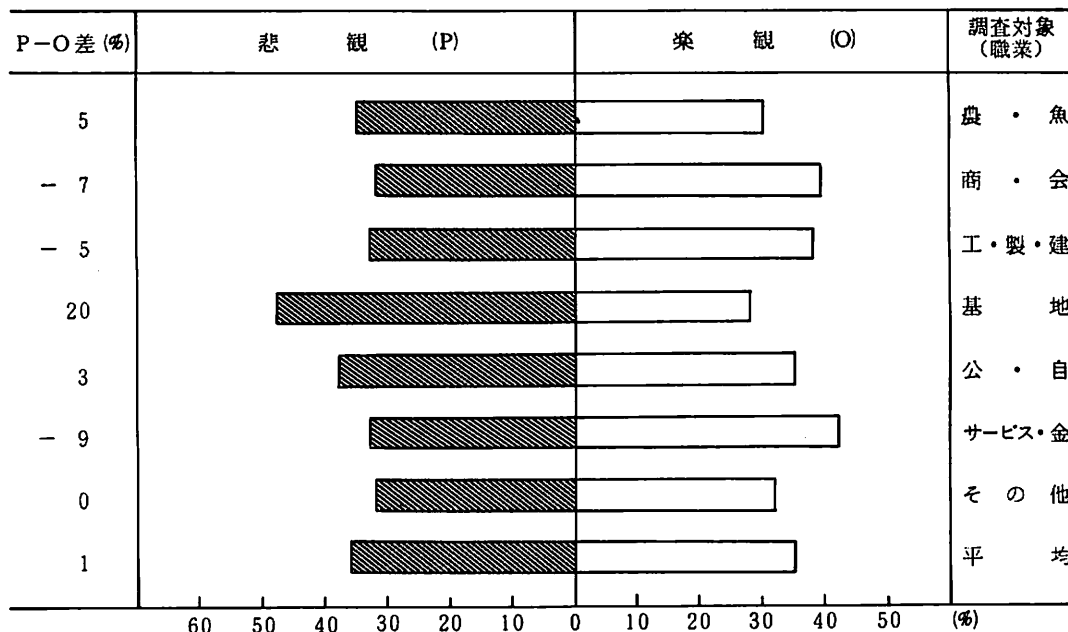


図 14 米国に対する不安の職業差

3) 不安の種類

(1) 戦争不安

a 年齢別比較

図15は不安の4領域と3対象をこみにし、戦争不安の結果について各年齢別に示したものである。

図15から、すべての年齢層において悲観値が楽観値を上回り、悲観的傾向が認められる。その中で、悲観値が最も高いのは50代、次いで40代となっている。楽観値を見ると、最も高いのは60歳以上の年齢層であり、最も低いのは20代及び30代である。

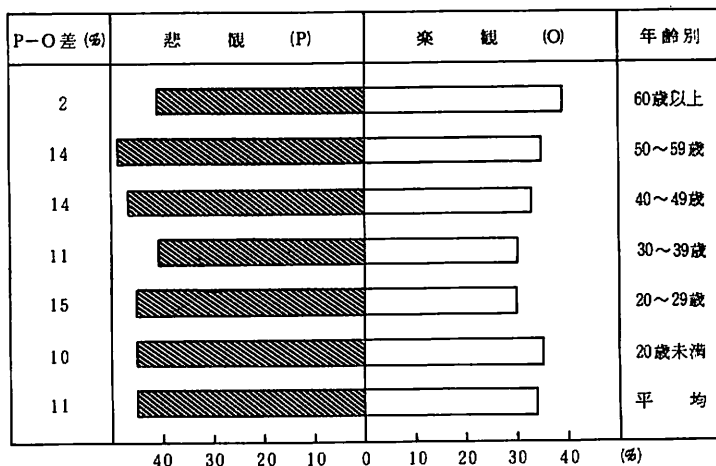


図 15 戦争不安の年齢別比較

P-O差の結果から、20代、40代、50代の年齢層が高く、60歳以上の層が最も低い。このような結果から、戦争不安に対し悲観的傾向が強いのは20代、40代、50代の年齢層であり、逆に弱いのは60歳以上の年齢層である。表10は不安の3種類について4領域をこみにし、対象別に各年齢ごとに結

果をまとめたものである。戦争不安の対日本に関して見ると、60歳以上の年齢層において楽観値が悲観値を上回り楽観的態度を示しているが、他のすべての年齢層においては逆に悲観的態度を示している。対沖縄に関して、ほとんどの年齢層が悲観的態度を示している。対米国に関し、20歳未

表10 種類別、対象別にみた不安の年齢別比較

種類	年齢別 反応カテゴリ 対象	20歳未満	20~29歳	30~39歳	40~49歳	50~59歳	60歳以上	平均							
		悲 楽	悲 楽	悲 楽	悲 楽	悲 楽	悲 楽	悲 楽							
戦争不安	対日本	54 (23)	31 (22)	45 (15)	30 (15)	51 (20)	31 (21)	54 (21)	33 (10)	37 (-10)	47 (15)	49 (15)	34 (15)		
	対沖縄	48 (15)	33 (16)	47 (11)	31 (11)	43 (13)	32 (13)	48 (11)	35 (11)	47 (11)	36 (0)	41 (11)	46 (11)	35 (11)	
	対米国	34 (-14)	48 (4)	37 (7)	33 (7)	36 (8)	29 (8)	41 (9)	33 (9)	46 (9)	37 (17)	46 (17)	29 (5)	40 (5)	35 (5)
自治不安	対日本	47 (16)	31 (17)	47 (27)	30 (27)	49 (27)	22 (23)	51 (23)	28 (21)	53 (21)	32 (-20)	29 (-20)	49 (14)	46 (14)	32 (14)
	対沖縄	43 (4)	39 (12)	43 (12)	31 (14)	44 (14)	30 (11)	47 (11)	36 (16)	51 (16)	35 (21)	52 (21)	31 (13)	47 (13)	34 (13)
	対米国	32 (-14)	46 (-5)	34 (-6)	39 (-6)	30 (-8)	36 (-8)	34 (-6)	42 (-6)	38 (-6)	44 (-10)	29 (-10)	39 (-8)	33 (-8)	41 (-8)
人権不安	対日本	37 (-10)	47 (-5)	35 (-5)	40 (-8)	34 (-8)	42 (-12)	34 (-12)	46 (-15)	35 (-15)	50 (-25)	31 (-25)	56 (-13)	34 (-13)	47 (-13)
	対沖縄	41 (3)	38 (12)	43 (12)	31 (9)	43 (9)	34 (2)	40 (2)	43 (-2)	45 (-2)	28 (-16)	44 (-16)	40 (1)	39 (1)	39 (1)
	対米国	31 (-9)	40 (-4)	28 (-4)	32 (-2)	31 (-2)	33 (-2)	36 (-2)	38 (2)	43 (2)	41 (2)	28 (-14)	42 (-14)	33 (-5)	38 (-5)

表11 種類別、領域別にみた不安の年齢別比較

種類	年齢別 反応カテゴリ 領域	20歳未満	20~29歳	30~39歳	40~49歳	50~59歳	60歳以上	平均							
		悲 楽	悲 楽	悲 楽	悲 楽	悲 楽	悲 楽	悲 楽							
戦争不安	政治	54 (28)	26 (26)	50 (26)	24 (15)	43 (15)	28 (15)	52 (25)	27 (20)	53 (20)	33 (10)	39 (10)	29 (21)	49 (21)	28 (21)
	経済	50 (14)	36 (26)	51 (26)	25 (19)	42 (19)	23 (20)	49 (20)	29 (14)	47 (14)	33 (14)	44 (14)	30 (18)	47 (18)	29 (18)
	文化	46 (10)	36 (10)	43 (10)	33 (4)	40 (4)	36 (4)	43 (8)	39 (8)	49 (8)	41 (8)	45 (-1)	46 (5)	44 (5)	39 (5)
	社会	31 (-20)	51 (-8)	34 (-8)	42 (6)	39 (6)	33 (7)	43 (7)	36 (7)	47 (12)	35 (12)	36 (-12)	48 (-12)	38 (-3)	41 (-3)
自治不安	政治	33 (-11)	44 (7)	41 (7)	34 (7)	33 (-2)	35 (-2)	38 (-4)	42 (-4)	43 (-1)	44 (-1)	31 (-7)	38 (-7)	37 (-3)	40 (-3)
	経済	56 (27)	29 (22)	50 (22)	28 (41)	58 (41)	17 (41)	62 (41)	21 (44)	65 (44)	21 (25)	48 (25)	23 (34)	57 (34)	23 (34)
	文化	48 (13)	35 (15)	45 (15)	30 (9)	40 (9)	31 (4)	41 (4)	37 (3)	43 (3)	40 (28)	54 (28)	26 (12)	45 (12)	33 (12)
	社会	25 (-22)	47 (-11)	30 (-11)	41 (-3)	32 (-3)	35 (-4)	36 (-4)	40 (-5)	38 (-5)	43 (-59)	12 (-59)	71 (-17)	29 (-17)	46 (-17)
人権不安	政治	40 (0)	40 (8)	39 (8)	31 (-3)	36 (-3)	39 (-4)	39 (-4)	43 (-1)	43 (-1)	44 (-14)	32 (-14)	46 (-3)	38 (-3)	41 (-3)
	経済	38 (-4)	42 (15)	41 (15)	26 (12)	41 (12)	29 (10)	44 (10)	34 (5)	44 (5)	39 (-27)	19 (-27)	48 (2)	38 (2)	36 (2)
	文化	36 (-5)	41 (6)	39 (6)	33 (9)	39 (9)	30 (5)	40 (5)	35 (7)	46 (7)	39 (-12)	33 (-12)	45 (2)	39 (2)	37 (2)
	社会	32 (-11)	43 (-22)	23 (-22)	45 (-18)	27 (-18)	45 (-26)	27 (-26)	53 (-29)	29 (-29)	58 (-19)	31 (-19)	50 (-21)	28 (-21)	49 (-21)

満が楽観的態度を示しているのに対し、他の年齢層は一様に悲観的態度を示している。特に60歳以上でその態度は強い。表11は不安の3種類について3対象をこみにし、領域別に各年齢ごとに結果をまとめたものである。戦争不安を領域別に見ると、政治、経済の領域において各年齢層とも、悲観値が楽観値を上回って悲観的傾向を示している。とりわけ、政治領域における20歳未満、20代、40代のP-O差、経済領域における20代のP-O差

は高い。文化領域においても、ほとんどの年齢層が悲観的傾向を示している。社会領域の20歳未満の楽観的傾向は強い。

b 政党別比較

戦争不安について、4領域、3対象をこみにして支持政党（ここでは自民、民社、新自由を保守とし、社大、社会、共産、公明、社民連を革新として2分した）別に結果を示したのが図16である。

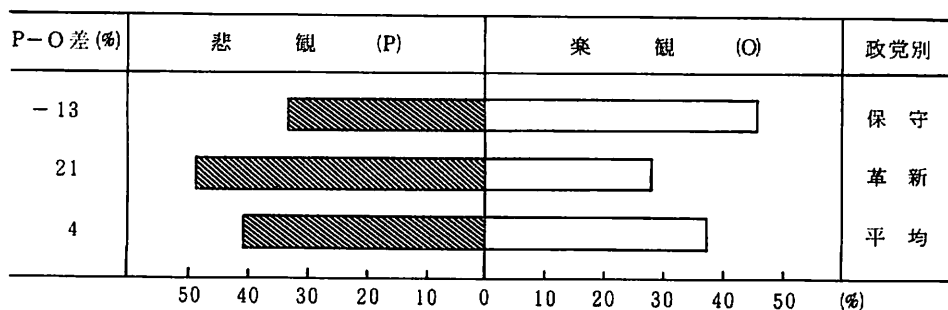


図16 戦争不安の政党別比較

図16から、戦争不安に関し、保守は楽観値が悲観値を上回って楽観的傾向を示し、革新は悲観値が楽観値を上回って悲観的傾向を示している。また、保守のP-O差と革新のP-O差を絶対値で比較すると、革新が保守を上回り、保守が楽観的である度合よりも革新が悲観的である度合が大きいことを意味している。表12は不安の3種類について4領域をこみにし、対象別に各政党ごとに結果をまとめたものである。戦争不安の3対象に関して、

保守は楽観値が悲観値を上回って楽観的傾向を示しているのに対して、革新は逆に悲観的傾向を示している。P-O差の絶対値の比較から、3対象に関して保守の楽観的度合よりも革新の悲観的度合が大きいことが示される。特に対日本に関する、

表13 種類別、領域別にみた不安の政党別比較

表12 種類別、対象別にみた不安の政党別比較

種類	領域	政党別	
		保守	革新
戦争不安	対日本	29 (-16)	45 (38)
	対沖縄	35 (-11)	46 (22)
	対米国	29 (-17)	46 (23)
	対日本	48 (15)	33 (37)
自治不安	対沖縄	42 (-3)	45 (15)
	対米国	25 (-24)	49 (5)
	対日本	33 (-21)	54 (4)
人権不安	対沖縄	34 (-14)	48 (17)
	対米国	24 (-32)	56 (5)
	対日本	41 (4)	37 (17)

種類	領域	政党別	
		保守	革新
戦争不安	政治	28 (-23)	51 (45)
	経済	35 (9)	26 (38)
	文化	34 (-27)	51 (23)
	社会	34 (-12)	46 (14)
自治不安	政治	34 (-9)	43 (10)
	経済	48 (15)	33 (54)
	文化	42 (-3)	45 (17)
人権不安	政治	20 (-44)	64 (11)
	経済	35 (-12)	47 (26)
	文化	38 (-3)	41 (15)
	社会	28 (-29)	57 (-18)



保守と革新の悲観値の差は大きい。表13は不安の3種類について3対象をこみにし、領域別に各政党ごとに結果をまとめたものである。戦争不安の政治、文化、社会の領域に関して、保守は楽観的傾向を示しているのに対して、革新は4領域に関して悲観的傾向を示している。P-O差の絶対値の比較から、政治の領域、社会の領域において、保守の楽観的度合より革新の悲観的度合が大きい。反面、文化の領域においては革新の悲観的度合より保守の楽観的度合がわずかに大きい。また政治

領域における悲観値及び楽観値それぞれについて、両政党間の差は極めて大きい。

(2) 自治不安

a 年齢別比較

自治不安の結果について、各年齢別にまとめ示したのが図17である。60歳以上の年齢層は楽観値が悲観値を上回っているが、その他の年齢層においては逆の結果になっている。悲観値が最も高いのは50代で、最も低いのは60歳以上の層である。

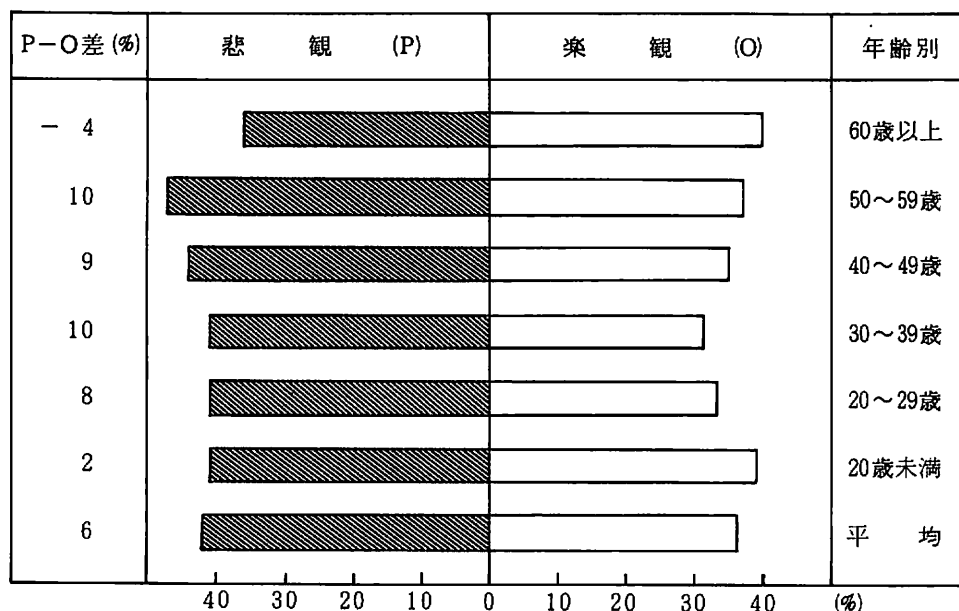


図17 自治不安の年齢別比較

他方、楽観値を見ると、最も高いのが60歳以上であり、最も低いのは30代である。またP-O差の結果から、20代から50代にかけては若干の差は見られるものの、ほとんど同様な悲観的傾向を示している。表10から、自治不安の対日本に関して、60歳以上の層が楽観的態度を強めているのに対し、他のすべての年齢層は悲観的態度を示している。特に30代にその傾向が強い。対沖縄に関しては、すべての年齢層が悲観的態度を示し、その中で60歳以上にその傾向が強い。反面、対米国に関してはすべての年齢層が楽観的態度を示している。表11から、自治不安の政治領域をみると、20代以外のすべての年齢層において楽観値が悲観値を上回っている。経済、文化の領域では、すべての年齢

層が悲観的傾向を示している。とりわけ、経済領域の50代、40代、30代のP-O差は顕著に高い。また社会領域において、すべての年齢層が楽観的傾向を示し、その中で60歳以上の楽観値とP-O差は極めて高い。

b 政党別比較

自治不安の結果について、支持政党別にまとめ示したのが図18である。自治不安に関しても、保守は楽観値が悲観値を上回って楽観的傾向を示し、革新は逆に悲観的傾向を示している。また、保守と革新のP-O差の絶対値の比較から、革新が保守を上回り、保守が楽観的である度合よりも革新が悲観的である度合が大きいことが理解できる。

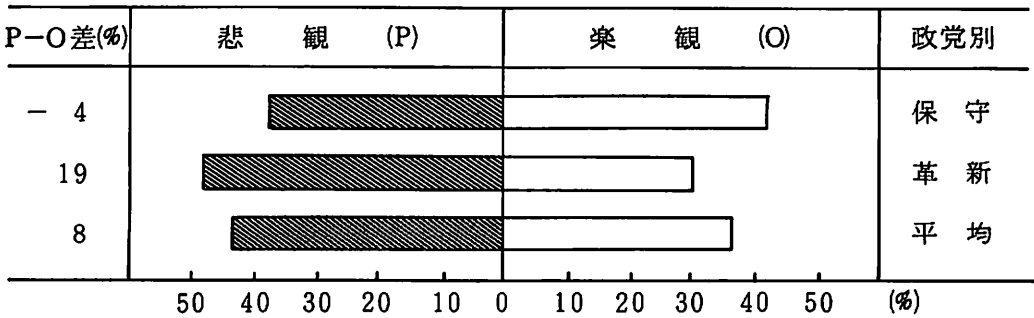


図 18 自治不安の政党別比較

表12から、自治不安の3対象について見ると、保守は対日本に関して悲観的態度を示しているが、対沖縄、対米国に関しては楽観的態度をとっている。特に対米国に関する楽観値やP-O差は高い。他方、革新は3対象に関して楽観値に比べ悲観値が高く、悲観的態度が見られる。特に対日本に関して、悲観的態度が強く現れている。表13の自治不安の4領域に関して、保守は政治、文化、社会の領域において楽観値が悲観値を上回って楽観的傾向が見られる。特に社会領域においてその傾向が強い。他方、革新はすべての領域において悲観的傾向が見られる。特に経済領域において顕著である。保守も経済領域においては、悲観的傾向を示しているが、保守と革新のP-O差の絶対値の

比較から検討すると、保守の悲観的割合に比べ革新のそれは極めて大きい。

### (3) 人権不安

#### a 年齢別比較

人権不安の結果について、各年齢別にまとめ示したのが図19である。20代と30代以外の各年齢層において楽観値が悲観値を上回って楽観的傾向を示している。楽観的傾向のもっとも強いのは60歳以上の年齢層である。逆に悲観的傾向が見られるのは20代の年齢層のみである。表10の人権不安の対日本に関し、すべての年齢層が楽観的態度を示し、とりわけ60歳以上、50代の年齢層にその傾向が強い。対沖縄に関しては、50代と60歳以上の年

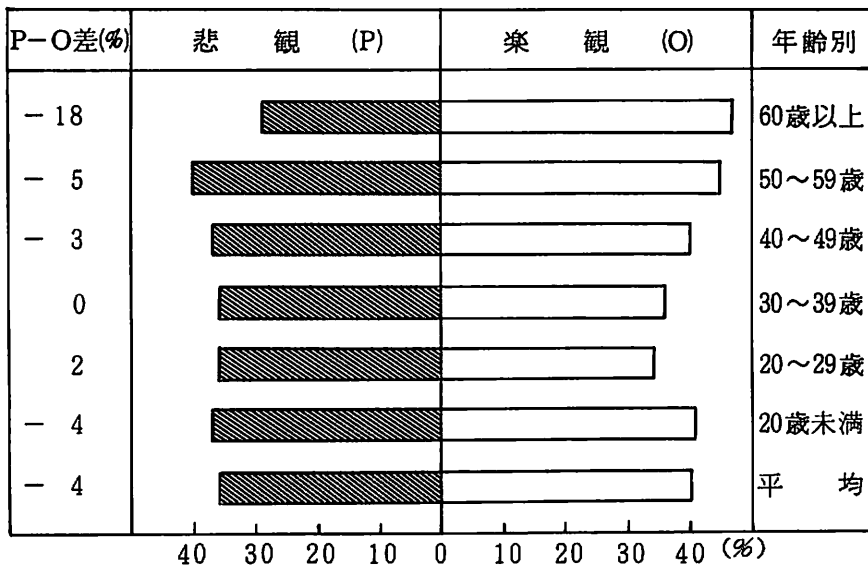


図 19 人権不安の年齢別比較

年齢層が楽観的態度を示し、他の年齢層においては悲観的態度が見られる。対米国に関し、50代のみには悲観的態度が見られ、他のすべての年齢層においては楽観的態度が見られる。特に60歳以上の楽観的態度は強い。表11の人権不安の政治領域において、20歳未満と20代の若年層以外の年齢層に楽観的傾向が見られる。経済と文化の領域において、20歳未満と60歳以上の両年齢層は楽観的傾向を示し、特に経済領域の60歳以上の層にこの傾向が強

い。一方、他の年齢層は悲観的傾向を示している。社会領域に関しては、すべての年齢層が一様に楽観的傾向を強めている。とりわけ、50代、40代の楽観値とP-O差の値は高い。

b 政党別比較

人権不安の結果について、支持政党別にまとめ示したのが図20である。人権不安に関しても、保守は楽観値が悲観値を上回って楽観的傾向を示し、

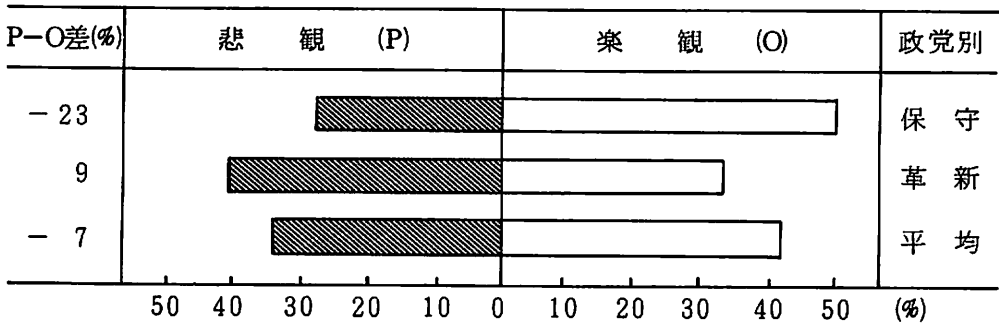


図20 人権不安の政党別比較

革新は悲観値が楽観値を上回って悲観的傾向を示している。また、保守と革新のP-O差の絶対値の比較から、保守が革新を上回り、革新が悲観的である度合よりも保守が楽観的である度合が大きいことがわかる。表12から、人権不安の3対象について見ると、保守は対日本、沖縄、米国に関して楽観値が悲観値を上回って楽観的態度が認められる。特に対米国に関しての楽観値とP-O差は高い。他方、革新は3対象に関して悲観値が楽観値を上回って悲観的態度が見られる。その中で対沖縄に関する悲観値とP-O差は高い。また、対米国に関して、保守と革新のP-O差の絶対値の差が大きい。これは保守の楽観的度合が革新の悲観的度合より大きいことを意味している。次に、表13から人権不安の4領域に関して見ると、保守は4領域に関して楽観値が悲観値を上回って楽観的傾向を示している。その中で、政治領域における楽観値とP-O差は極めて高い。他方、革新は政治、経済、文化の領域において悲観的傾向が見られる。政治領域において保守と革新のP-O差の絶対値の比較から、保守の絶対値が高い。この結果は、保守の楽観的傾向が革新の悲観的傾向を

はるかに上回っていることを示すものである。社会領域に関しては、革新も楽観的傾向を示し、保守、革新とも相対的に類似した選択的傾向が見られる。

以上、3種の不安について個別的に結果を分析してきたが、3種類の悲観値やP-O差の平均から見ると、沖縄住民は相対的に戦争、自治に関してこの順序で悲観的傾向を強め、逆に人権に関しては楽観的傾向を持っている。そして、戦争や自治に関する悲観的度合は人権に関して抱く楽観的度合よりも大きいのである。20歳未満や20代の若年層は、相対的に政治や経済の領域で戦争不安を抱いている。例えば項目2の「アジアにおける日本の役割は年々大きくなって、そのためにアジア諸国との緊張や利害の対立が年々強まってしまう」とや、項目19の「日本の大企業が、次第に軍事産業に手をのぼしつつあると思う」等への回答率が高い。このように若年層は、日本の国際的地位の向上や日本の経済成長、企業の実績等が不安要因にもなり得ると危惧しているのである。他方、30代以上の年齢層は、相対的に経済領域において自治不安を高めている。例えば項目28の「沖縄県

民の利益を守るために、今後県内産品を愛用すべきだと思う」や項目29の「沖縄の企業は、今後も当分の間保護していくべきだと思う」等の回答率が高い。このように、中高年齢層は自らの社会的地位や役割とも関連して、身近な実際の生活や企業との関わりで不安を抱いていると解される。

また支持政党別の結果の比較から、保守は相対的に経済や文化の領域で自治不安に関する悲観値が高く、どちらかと言うと上述の中高年齢層者と類似した不安内容が見られる。他方、革新は相対的に政治や経済の領域で戦争不安に関する悲観値が高く、ほぼ若年齢層者と類似した不安内容が見られる。

## 2. 復帰不安の構造

### 1) 項目全体の分析

全72項を林Ⅲ類で処理して得た3つの軸は表14の最下段に示された通りである。〈悲観-中性〉、〈悲観-楽観〉、〈受容-拒否〉の3軸はいずれも好悪感情と関係の深いものばかりであるが、これは調査項目すべてが不安の有無を中心に設問されている事と関係があると思われる。因に、表14には不安の種類別、領域別、あるいは対象別に、限定された関連項目のみについて、同様の数値化理論による処理の結果が掲げられているが、軸の名称は非常に似通っている。同じ理由によるものと言えよう。

表 14 不安カテゴリー別に林Ⅲ類で得た軸

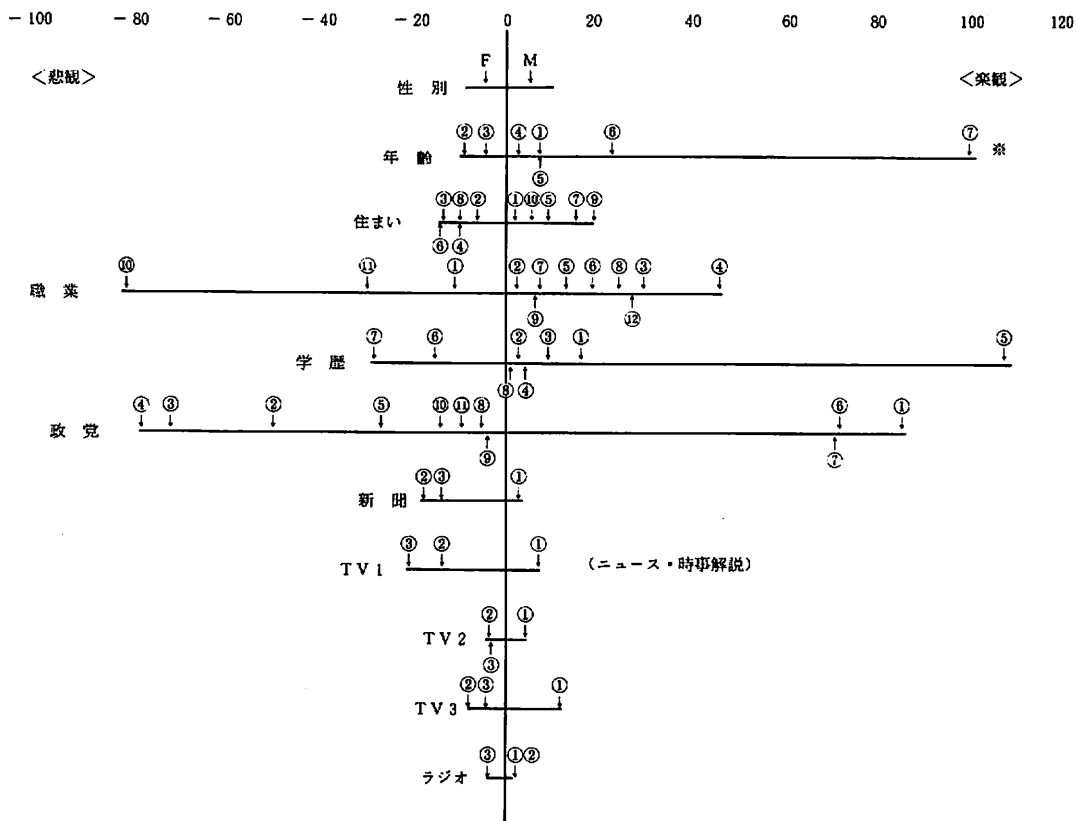
	不安のカテゴリー	第 1 軸*	第 2 軸	第 3 軸
不安の種類	戦争不安	悲観-楽観・中性	楽観-中性	——
	自治不安	個性の肯定-中性	楽観-悲観	——
	人権不安	楽観-中性	楽観-悲観	——
不安の領域	政治	悲観-楽観	楽観-中性	——
	経済	悲観-中性	楽観-中性	排他的楽観 - 弁別的悲観
	文化	楽観-中性	悲観-楽観	——
	社会	悲観-中性	楽観-悲観	——
不安の対象	日本	対日不信-中性	対日積極評価-中性	——
	米国	対米否定的評価-中性	親米-反米	——
	沖縄	不協和受容-中性	悲観-楽観	——
全体	復帰不安	悲観-中性	悲観-楽観	受容 - 拒否

\* 左側は (-) 極, 右側は (+) 極

第2軸を取り上げてみると、(-)極に大きく負荷した項目はQ1イ、<sup>\*</sup>Q3イ、Q4イ、Q11イ、Q17イ、Q19イ、Q30イ、Q31ロ、Q37イ、Q58イの10項目で、例えばQ1「あなたは、復帰に伴って自衛隊が沖縄に配備されたために、かえって戦争の危険性が高まったと思いますか。」に対し、(イ)高まったと思う、と答えている。その他9問に対する答えもすべて悲観的なものばかりである。(+)極に高い負荷のある項目はQ1ロ、Q3ロ、Q4ロ、Q11ロ、Q17ロ、Q19ロ、Q30ロ、

Q31イ、Q37ロ、Q58ロの10項目で、いずれも真正面から上記の悲観的答えを打ち消したものとなっている(詳しくは付表の各項目と照合して検討していただきたい)。この明らかに〈悲観-楽観〉と命名できる軸に対して、本調査の対象者たちがどう布置しているかを示したのが図21である。この軸と一番関係の深いのが政党変数であり、ついで学歴、職業、年齢等の変数であることがわかる。政党について言うと、自民党支持者①が最も楽観的であり、逆に社大②、社会③、共産④の順に次第に悲観的となっている。公明⑤、社民連⑧はやや悲観的となっていて革新グループの一角を占め

\*付表の項目番号と選択肢の記号を指す。



※○内の数字は、本文中の表1～6の各項目に付された番号を示す。

図21 復帰不安の構造(全項目)第2軸

ていると見なすことができるが、民社⑥と新自由クラブ⑦はかなり(+極寄りであり、自民党に接近していることがわかる。これは一般的観察とほとんど完全に一致していると言える。学歴変数については、高学歴者ほど悲観的であり、低学歴者はやや楽観的となっている。(+)極へ突出した旧制専門学校卒⑤は、人数が極めて少ないので、特異反応と見なすのが妥当であり、ここでは無視してさしつかえない。また、職業別では、基地関係職⑩が最も悲観的で、公務員⑪がそれにつき、逆に楽観的なのは、工業④、商業③、自由業⑫、金融業⑧、建設業⑥などである。他の職業は極端な態度をとっていないが、農業①がやや悲観的であるのが注意をひく。年齢では、20代②、30代③がやや悲観的であるが、40代④、50代⑤、60代⑥と年齢が高くなるにつれて楽観的になっているのがわかる。極端に楽観的となっている70代⑦は、学歴の

場合と同様、対象者数が少なすぎるので無視してさしつかえない。10代①のみが特異反応を示しているが、これは調査対象から除外指示のあった年齢層であるので、特異群と見なした方がよさそうである。性差は大きくないが、女性が男性に比べてより悲観的であるのは注目に価する。地域差もそれほど大きくはないが、知念⑥、読谷③、ユザ④、宮古⑧、名護②はやや悲観的で、反対に八重山⑨、糸満⑦、那覇⑤は低不安の傾向を示している。前者には基地隣接した地域が含まれて、後者には保守化傾向のある地域が含まれている点では理解できるが、知念と宮古の位置づけが困難である。前節でも触れた通り、宮古では全般的に悲観または不安傾向が強いので、それは基地と結びつけるより、社会文化的なもの結びつけて解釈を試みた方がよさそうである。なお、この軸はマスコミ接触度とは余り関係はないが、図21によれば、

新聞とテレビのニュースおよび時事解説はやや例外で、いずれの場合にも、接触の多いものは悲観的であり、少ないものは楽観的となっている。なぜそうなのか、を推論することは興味あることであると思われる。最後にこの軸の性質について一言つけ加えると、同軸と関係の深い10項目中、6項目は戦争不安を表わすものであり、領域別では8項目までが政治・経済に集中したことである。本調査では72項目を設けて復帰不安をとらえようとしたのであるが、復帰不安の潜在的構造を特徴づけるものが、自治・人権不安でなく、戦争不安であり、また社会・文化的不安ではなく、政治・経済的不安であることは、今日の沖縄のトータルな状況を暗示するものである。

## 2) 領域別不安の分析：文化領域

上記の全項目の分析では政治・経済の分野の項

目が多く見られたが、それを裏づけるかのように、政治、経済いずれの領域における分析結果も、全項目の分析結果と近似するものがあつたので、ここでは文化領域における不安の構造を取り上げることにする。同領域に關係する18項目について、ここでも林数量化理論Ⅲ類によって処理した。第2軸はここでも表14に見られる通り、＜悲観－楽観＞であった。この軸の(-)極に負荷の大きな項目は、「沖縄の人が方言を使うと、本土の人は軽蔑的な目で見ると思う」(Q49イ)<sup>\*</sup>の他、Q37イ、Q38イ、Q41イ、Q42イ、Q43イ、Q46イ、Q48ロ、Q50イ、Q53ロなどである。全般的に悲観または否定な傾向が見られる。反対に(+ )極には楽観的意見の項目が大きく負荷している。

上記の文化領域の第2軸に本調査の対象者各群の平均値の布置を示したのが図22である。この軸に深く関わっているデモグラフィック要因は学歴、

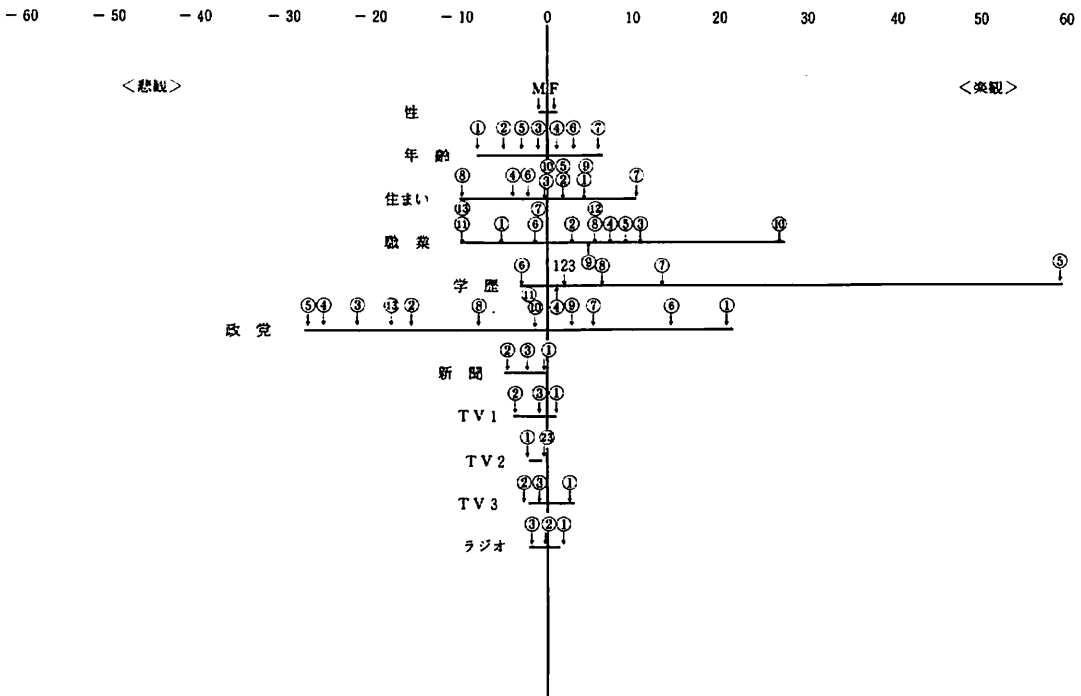


図 22 復帰不安の構造（文化領域）第2軸

<sup>\*</sup>数字とイロハ記号は付表の項目番号と選択肢の記号を指している。詳しくは付表参照。

支持政党，職業等の変数であることがわかる。学歴変数では，短大⑥が悲観的であるのに対し，大学⑦は楽観的となっている。低学歴層はほとんど中性に近くなっている。旧専門学校卒⑤は高い楽観値を示しているが，少ないケース数（人数）にもとづいたものであるので無視してもさしつかえない。支持政党については，自民①，民社⑥が楽観的であり，社大②，社会③，共産④へと次第に悲観度が高まっていくのは，全体の分析で得られた結果と一致するが，顕著に異なるのは公明⑤が文化的に最も悲観的であることと，新自ク⑦が民社⑥と比較しても，一段と楽観度が低く，中性寄りに位置づけられていることである。職業別には，基地関係者⑩が最も楽観的で，公務員⑪が最も悲観的となっている。図21と比較して注目されるのは，基地関係者⑩が悲観から楽観へ転じていることである。全項目の分析では戦争不安が基調であったのに対し，文化領域の第2軸では対米不安が基調になっていて，こと文化問題に関しては基地関係者は米国に対して何ら不安を感じていないことを示唆する。ここで特に注目されるのは，公務

員⑪が戦争不安でも文化領域でも無差別に悲観的であったのに対し，米人との接触の多いはずの基地関係者は両事態をはっきりと区別し，一方には悲観を，他方に楽観の態度を示していることである。

### 3) 対象別不安の分析：対日本

日本を対象として設定された全24項目について林Ⅲ類で処理して得られた結果は表14の通りである。第1軸は<対日不信-中性>と命名されたが，同軸の(-)極に高負荷のある項目は，「復帰後日本政府は，沖縄の人々の生活を安定させ，差別をなくすように努力してきたとは思わない」(Q14ロ)<sup>\*</sup>，その他Q19イ，Q20イ，Q27ロ，Q37イ，Q38イ，Q43イ，Q49イ，Q50イ，Q61ロ等である。(+)極に高負荷を示した項目はすべて「どちらともいえない」という選択肢であったので，<中性>を表わす極であると考えられる。

この第1軸に対する調査対象者群の平均布置を示したのが図23である。この軸に関係の深いデモグラフィック変数は，学歴，職業，年齢，支持政

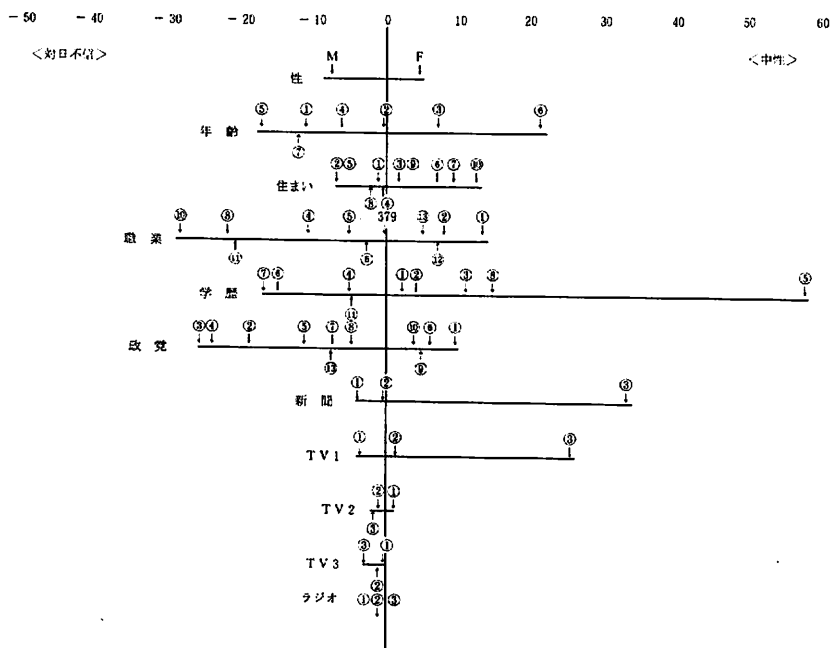


図 23 復帰不安の構造 (対日本) 第 1 軸

<sup>\*</sup>前掲脚注同様，付表の項目番号と選択肢のイロハ記号を指す。

党などである。学歴変数では、人数の少ない旧制専門学校⑤を除外すると、低学歴者①②③は中性的態度を示し、学歴が高校④、短大⑥、大学⑦と高まるにつれて悲観的になっている。職業別では、第一次産業やサービス業等が中性反応を示し、基地関係業⑩、金融⑧、公務員⑪等は強い対日不信を示していることがわかる。年齢変数の効果は単純線型ではない。まず、10代①から30代③にかけて対日不信は次第に弱まっていくが、その後は一転して40代④、50代⑤に向けて不信は強まり、その後もまた逆転に逆転を重ねている。世代差には社会的役割の違いや、新旧教育の差などさまざまな差が輻射しているの、対日感情にも複雑な屈折があるのかも知れない。新聞やテレビのニュース・解説の2変数の関わりも小さくない。いずれの場合も接触の多い者ほど不信感が強くなっている。しかし、テレビの娯楽番組(TV<sub>2</sub>, TV<sub>3</sub>)とラジオについては、接触の多少は関係がないのも興味深いものである。

#### 4) 種類別不安の分析：自治不安

自治不安と関係のある全24項について林Ⅲ類によって処理した結果、表14に示すような2つの解釈可能な軸が得られた。第1軸の(-)極に大きな負荷のある項目は「沖縄の住民が自分たちの望むような社会を作るためには、政治や企業あるいはその他の面で本土と積極的に系列化しない方がよい」(Q63ロ)の他、Q7イ、Q10イ、Q12イ、Q31ロ、Q43イ、Q48ロ、Q64ロ、Q65ロ、Q66イなどで、個性を重視したり、他者の影響を低く評価したり、自己の行動の効能を高く評価する傾向が認められる。他方、(+ )極の高負荷項目はすべて「どちらともいえない」選択であるので、この軸は<個性の肯定-中性>と命名できるように思われる。

この軸に対する各調査対象群の平均値の布置は図24の通りである。この軸と特に関係の深いデモグラフィック変数は職業、年齢、新聞接触度、学歴などであることがわかる。職業では、金融⑧、公

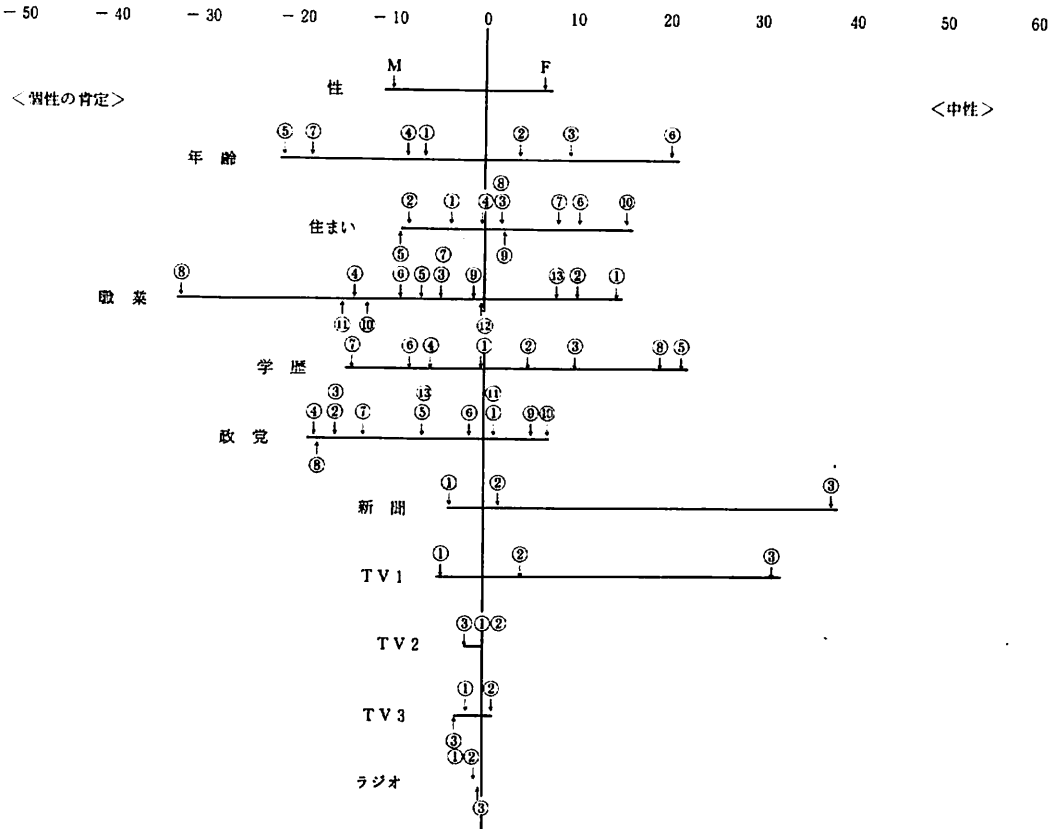


図24 復帰不安の構造(自治不安)第1軸



務員⑬, 工業④, 基地関係⑩に個性肯定の傾向が見られ, 逆に農業①, 漁業②の第一次産業関係者の間では「どちらともいえない」という中性の傾向が見られる。年齢については, 対日不安の第1軸の場合に見られたように, 非線型不定型の関係がうかがわれた。新聞は毎日読む人が, それほど読まない人よりも, また学歴については高学歴者が, 低学歴者よりも, 個性を重視する傾向があることがうかがえる。テレビのニュースや時事解説番組については, 新聞の場合と同様, 接触の多い者ほど個性尊重の傾向が見られるが, 他の不安分析の場合の結果と同様, テレビの娯楽番組やラジオの場合は, 接触度の高低とこの軸の間には何の関係も認められなかった。この軸の特徴の1つは, 支持政党の影響が相対的に小さいことである。戦争不安や政治・経済不安については保革の差は顕著であったが, 沖縄の個性についてはその差が縮まったと見られる。しかしここでも, 革新3党(②,

③, ④)は個性尊重の傾向を示し, 自民①と民社⑥は系列化, 一体化を肯定するなどの傾向があり, それだけ没個性的自治のフィロソフィーを持っているものといえる。ここで注目されるのは, 新自由クラブ⑦が他の保守派と異なり, 革新政党並みの個性肯定の傾向をもっていることである。

### 3 復帰後10年の沖縄社会の変動

#### 1) 領域別比較

表15は, 昭和47年度から昭和57年度にかけての不安の変動を, 不安の領域別, 不安の種類別および性別に比較したものである。不安の領域別変動の検討においては, 主として各領域における悲観値, 楽観値の変化を比較・考察していくが, 必要に応じて不安の種類別, 性別変動をも考慮に入れて検討していくことにする。

先づ, 図25は政治領域における不安の変動を性別に示したものである。男女をこみにした平均で

表15 領域別, 種類別不安の年度差(対象こみ)

性別	領域 種類 年度	政治				経済				文化				社会			
		戦争	自治	人権	平均	戦争	自治	人権	平均	戦争	自治	人権	平均	戦争	自治	人権	平均
		PO	PO	PO	PO	PO	PO	PO	PO	PO	PO	PO	PO	PO	PO	PO	PO
男	S 47	44 (14)	30 (-13)	42 (2)	39 (0)	46 (18)	28 (32)	56 (20)	30 (24)	51 (10)	27 (2)	45 (12)	38 (8)	41 (6)	35 (-12)	41 (-18)	34 (-8)
	S 57	50 (19)	31 (-5)	42 (-9)	40 (1)	49 (19)	30 (38)	61 (6)	23 (21)	43 (7)	37 (7)	43 (4)	36 (6)	44 (7)	37 (-5)	42 (-27)	36 (-8)
女	S 47	47 (22)	25 (-8)	35 (11)	46 (8)	42 (28)	24 (43)	62 (29)	19 (34)	57 (6)	23 (3)	44 (9)	39 (6)	42 (8)	34 (-11)	43 (-5)	38 (-3)
	S 57	47 (22)	25 (0)	36 (2)	40 (8)	44 (19)	25 (44)	61 (14)	17 (26)	43 (1)	29 (7)	40 (9)	31 (6)	40 (5)	33 (-4)	37 (-20)	27 (-6)

は, 悲観値, 楽観値とも年度による差異は認められない。しかし, 年度による不安の変動の在り方は男女差が著しく, また, 不安の種類によって異なることが表15の結果から明らかである。すなわち, 男性において戦争不安(44% vs 50%), 自治不安(32% vs 37%)の悲観値がかなり増加しており, 沖縄をとり巻く日米の政治-軍事情勢の最近の展開に関心を高め, かつ懸念を示していると言えよう。しかし, 人権不安においては, 男性も(42% vs 37

%)女性も(46% vs 40%)共に悲観値が減少し, 楽観的態度を示すようになってきている。おそらく, 復帰を境として沖縄人の基本的人権が尊重されるようになったことと無関係ではないと思われる。

次に経済領域においてはどのような変動が見られるであろうか。経済領域における不安の変動を性別に示した図26から, 女性の悲観値(56% vs 50%)にかなりの減少が見られ, 男性は悲観値に変動はないが, 楽観値(26% vs 30%)に増加が見ら

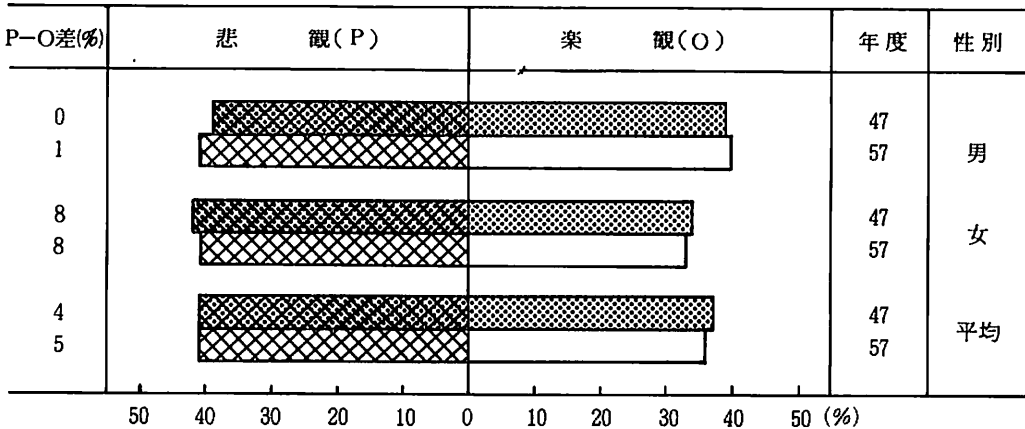


図 25 政治領域における不安の年度間比較 (対象, 種類こみ)

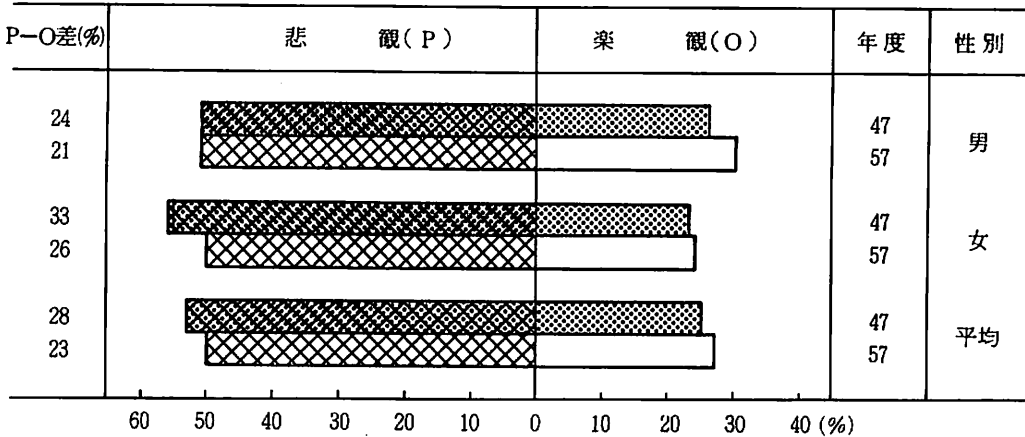


図 26 経済領域における不安の年度間比較 (対象, 種類こみ)

れ経済領域全体としては楽観的態度を示すようになってきていることがわかる。しかし、不安の種類、性別を考慮して年度差を検討していくと必ずしも楽観的になってきているとは言い難い。すなわち、戦争不安 (36% vs 39%)、自治不安 (36% vs 41%) において男性の悲観値が増加していることがわかる。また、男性とは逆に女性は戦争不安 (42% vs 34%) の悲観値が著しく減少している。人権不安においては男女共悲観値が大きく減少 (50% vs 43%, 56% vs 44%) し、米軍基地やアメリカ商社における沖縄人や、基地依存業者の立場が好転してきていることを予測させている。このように、経済領域における楽観的態度への変化は、人権不安の減少と女性の楽観的態度の増加を

反映していることがわかる。

文化領域における不安の変動では、男女共大きな変動は見ることができない (図27)。しかし、他の不安領域と同様に不安の種類と性のクロスで不安の変動を検討していくと、人権不安では男性 (45% vs 40%) も女性 (42% vs 40%) も悲観値が若干減少方向にある。しかし、自治不安では男性の悲観値が増加 (40% vs 43%) し、逆に戦争不安では女性の悲観値が減少 (44% vs 39%) してきている。しかし、その割には女性の楽観値は増加せず、楽観的になってきていると同時に、態度決定が困難になりつつあることを示している。

図28は、社会領域における不安の年度差を性別に示したものである。他の不安領域と同様にここ

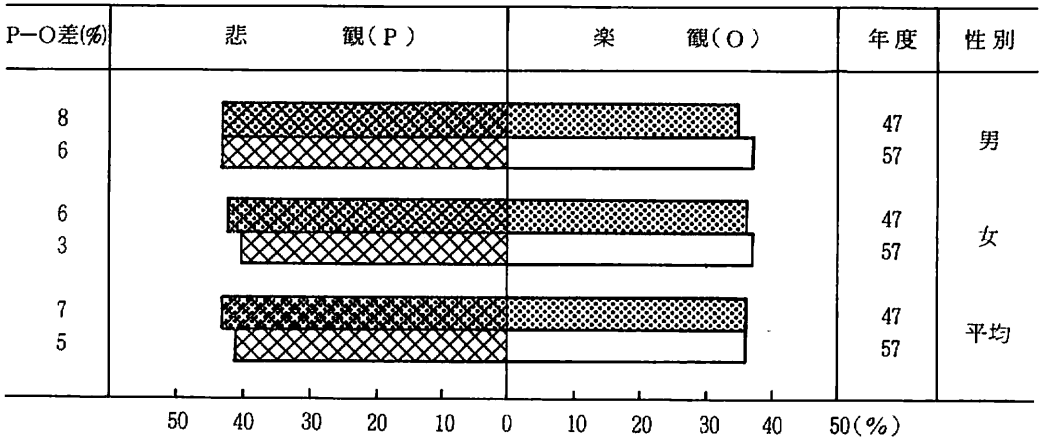


図27 文化領域における不安の年度間比較 (対象, 種類こみ)

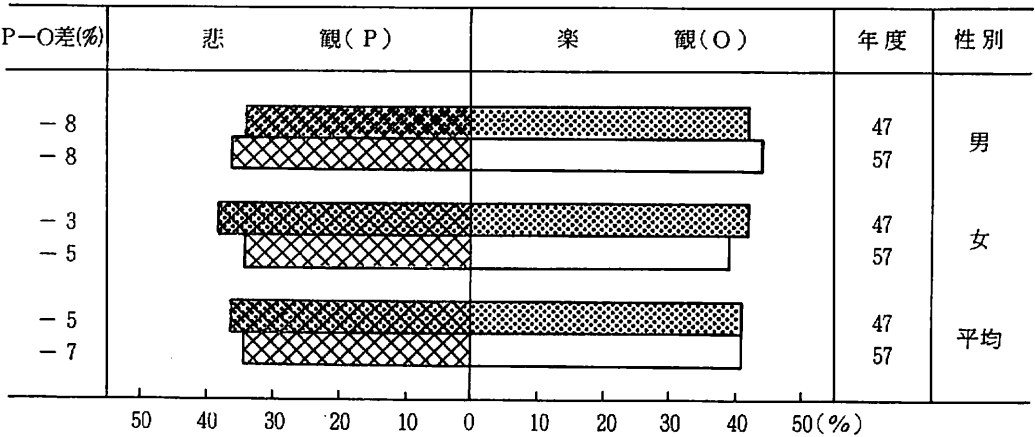


図28 社会領域における不安の年度間比較 (対象, 種類こみ)

でも不安の変動には男女差が著しいことがわかる。すなわち、男性は悲観値 (34% vs 36%)が増加しているのに対し、女性は悲観値 (38% vs 34%)が減少する方向にある。更に不安の種類別に不安の変動の男女差を追求していくと、男性は戦争不安 (41% vs 44%), 自治不安 (31% vs 37%)において悲観値が増加し、逆に女性は戦争不安 (44% vs 39%), 人権不安 (38% vs 27%)において悲観値がかなり減少してきている。

以上に述べてきたように、復帰10年後にかけての不安の変動は、いずれの領域においても男女差が顕著であり、また、不安の種類によって異なることがわかる。

## 2) 不安の対象別比較

次にここ10年の間に日本、沖縄、米国に対する不安感情がどのように変化してきたかということについて吟味してみよう。ここでも、復帰10年後の社会の結果で見てきたように、特に学歴と職業との関係でとらえて見ることにする。

### a 学 歴

前回の調査結果での特徴的事柄について簡条書きにまとめてみる。

1. いずれの学歴層でも、日本と米国に対しては悲観値が楽観値より高い。また、両国に対してはほとんど同じ悲観・楽観の反応パターンを示した。すなわち、高学歴者ほど日本・米国に対して、

悲観的反応が増加する傾向にあった。

2. 沖縄に対してはほとんど悲観値と楽観値に差が見られなかった。

これらの結果は、一言で言うならば、対外的な未知のものが、沖縄住民に不安状態を引き起こさせ、それが高学歴者ほど悲観的態度になって現われたものであった。一方、沖縄に対しては復帰に関する正確な予測可能な認識ができたことで、いずれの学歴層においても悲観・楽観の態度に差が現われなかったことが考えられた。

これらの態度はこの10年間でどのように変化してきたであろうか。復帰10年の沖縄の社会の結果で述べたように、日本に対する悲観値はどの学歴層でも依然として高く、特に高学歴層（短・大）では10年前の調査と比べてもほとんど変化していない。沖縄住民の日本に対する復帰前後からの不安はずっと持続していることがわかる。

しかし、それとは対照的にいずれの学歴層においても米国に対する悲観値は減少している。特に低・中学歴層は悲観的反応と楽観的反応の割合が同程度か、逆に楽観的態度の割合が多い学歴層もある。高学歴層は若干ではあるが悲観値が高い。いずれにしても米国に対する不安はここ10年間で減少して来たようである。

さらに沖縄に対してはどうであろうか。前回の調査では若干悲観値が高かったが、ほとんど楽観値と同程度であった。ところが今回の調査では高学歴層ばかりでなく、低い中学歴層でも悲観値が前回よりも高くなり、ここ10年間で沖縄に対する不安感情は高まってきている。

今回の調査で、他の学歴層とはまったく異なった結果になった旧制専門卒のものについて少しふれる。彼等はいずれの対象に対しても楽観的態度を示す結果がはるかに悲観的態度をしのいでいる。日本に対してはそれが特に高い結果になった。この結果については前回の調査と十分比較することができないので今回は考察をさしひかえたい。

## b 職業

まず始めに前回の調査結果の特徴的事柄についてまとめてみる。

1. 日本、米国に対しては、どの職業でも悲観値が楽観値を上回っていた。特に、公務員と基地

関係者（前回の調査では軍雇用者として扱った）で、その比率が高かった。

2. 沖縄に対しては、職種によって異なった結果が見られた。

- ・ 基地関係は悲観値より楽観値が高いという逆の結果になった。

- ・ 公・自の職業では悲観値が他の職業に比べて高い。

- ・ その他の職業では悲観値が楽観値に勝っているが、それほど大きな差ではない。

職業別で見られたこのような態度はこの10年間でどのように変化してきたのであろうか。今回の職業別調査結果については、復帰10年の沖縄の社会の項で述べた。ここでは沖縄住民の復帰に伴うこの10年間の不安感情の変化を考察する意味で、前回と今回の結果を職業別観点から検討してみる。

米国に対する悲観的態度は、学歴別で見えた場合と同様に基地関係者を除くと職業全般で好転しているように見える。しかし、基地関係者は対日本、対沖縄と同様な結果を示している。

日本に対する特徴的变化は楽観的態度も増えては来ているが、悲観的態度は減少せず、依然として変わらないことである。この傾向は特に農・漁、商・会、工・制・建の職種で見られる。さらに、基地関係職種では明らかに前回と比べて、対日不安が高まって来たことをものがたっている。

次に、対沖縄について見てみよう。学歴別比較でもみたように、この結果は全職業を通して不安感情がここ10年の間に高まって来たことを窺わせる。基地関係職種の悲観値と楽観値の割合が前回と比べて逆転していることは、特に不安感情の高まりを示す顕著な証拠であろう。

## 3) 種類別比較

不安の3種類について、前回の研究（与那嶺ら、1981）と今回の結果とを比較しまとめて示したのが図30である。3種類の不安の中で、前回（昭和47年度）と今回（昭和57年度）の結果で最も変化が大きく見られるのは人権不安である。人権不安の前回と今回の結果の比較において、悲観値は減少し楽観値が増加して全体的に楽観的方向に変化している。

次に各不安について対象別に結果を見ることに

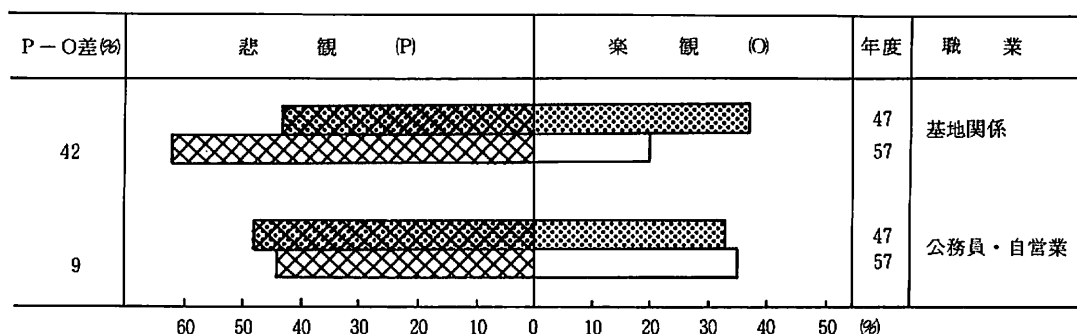


図29 職業差における不安の変化

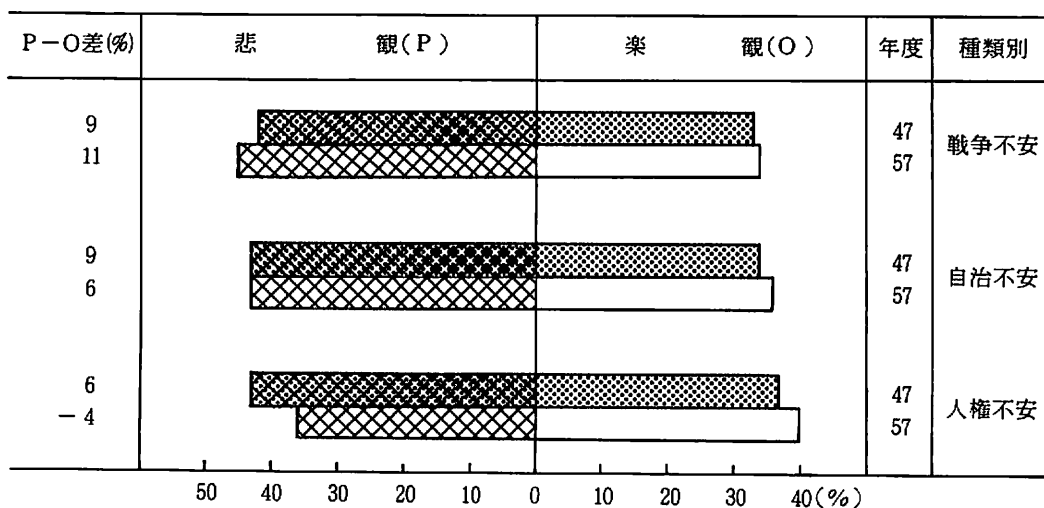


図30 各種不安の年度間比較

する。図31から、戦争不安の対日本に関してはほとんど変化は見られないが、対沖縄に関して、今回の結果では悲観値が増加し楽観値は減少して全体的に悲観的方向に変化している。これに対し、対米国に関しては今回悲観値が減少し楽観値は増加して楽観的方向に転じている。自治不安（図32）について、対沖縄、米国に関しては前回と今回の間にほとんど変化は見られない。対日本に関しては若干楽観的方向に転じている。人権不安（図33）について見ると、3対象に関して量的差はあるものの一様に楽観的態度に変化している。とりわけ、対米国に関する悲観値の減少、楽観値の増加等の変化は最も大きい。

次に3種の不安について各領域別に結果を整理

比較していくことにする。戦争不安（図34）について見ると、政治と文化の領域においては前回に比べ今回の結果は悲観的方向へ変化し、中でも文化領域における変化は大きい。他方、経済と社会の領域においては楽観的方向へ変化し、とりわけ社会領域の変化は大きい。図35の自治不安について見ると、前回と今回の間でほとんど変化がないのは経済領域である。わずかに楽観的方向に変化しているものの、依然として悲観の状態で留まっている。政治、文化の領域においては今回一様に悲観的方向に転じ、特に文化領域での変化が大きい。また、社会領域においては、顕著に好転した結果が見られる。人権不安（図36）の結果から、政治領域において、若干悲観的方向への変化が見

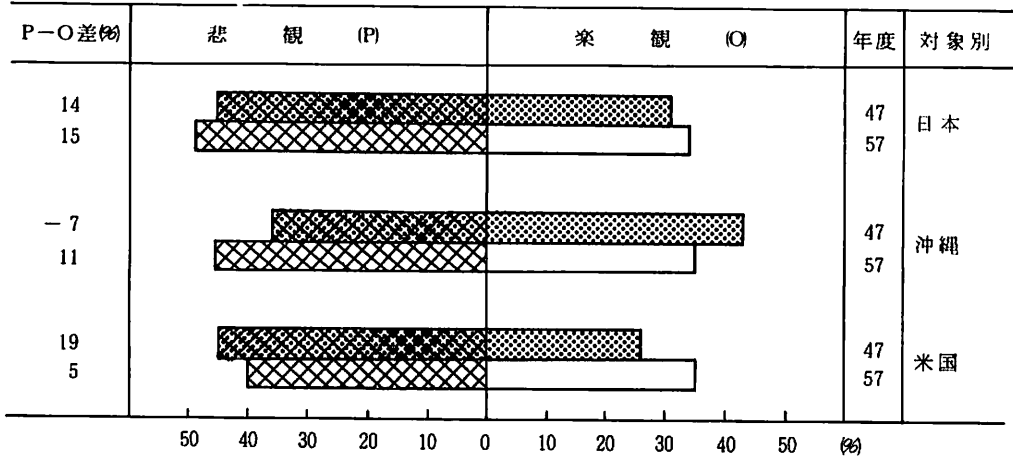


図 31 戦争不安の対象別にみた年度間比較

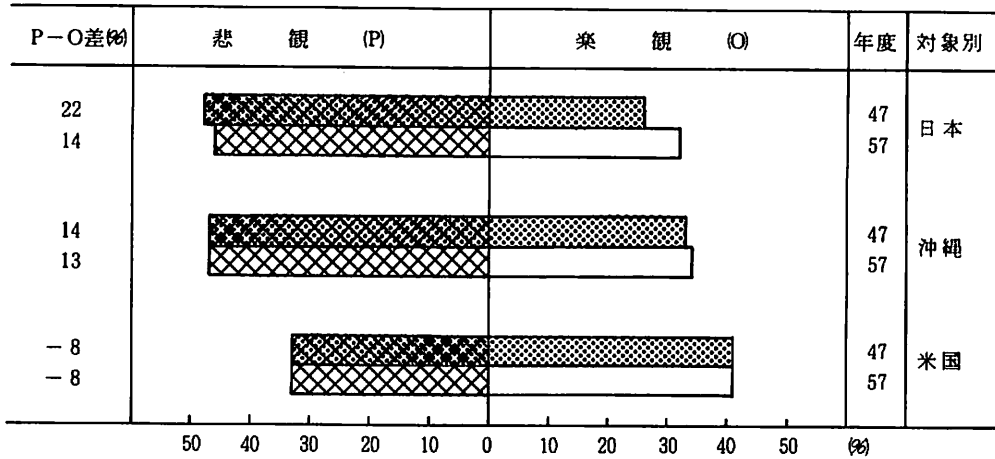


図 32 自治不安の対象別にみた年度間比較

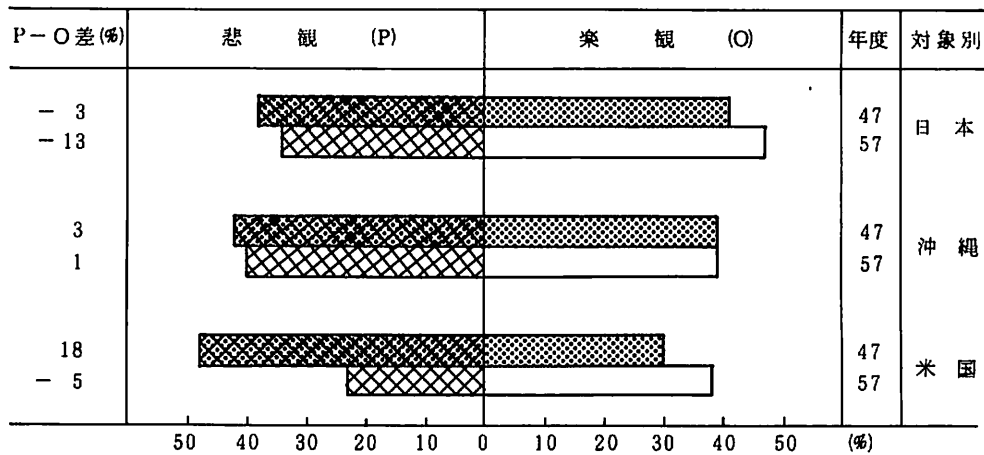


図 33 人権不安の対象別にみた年度間比較

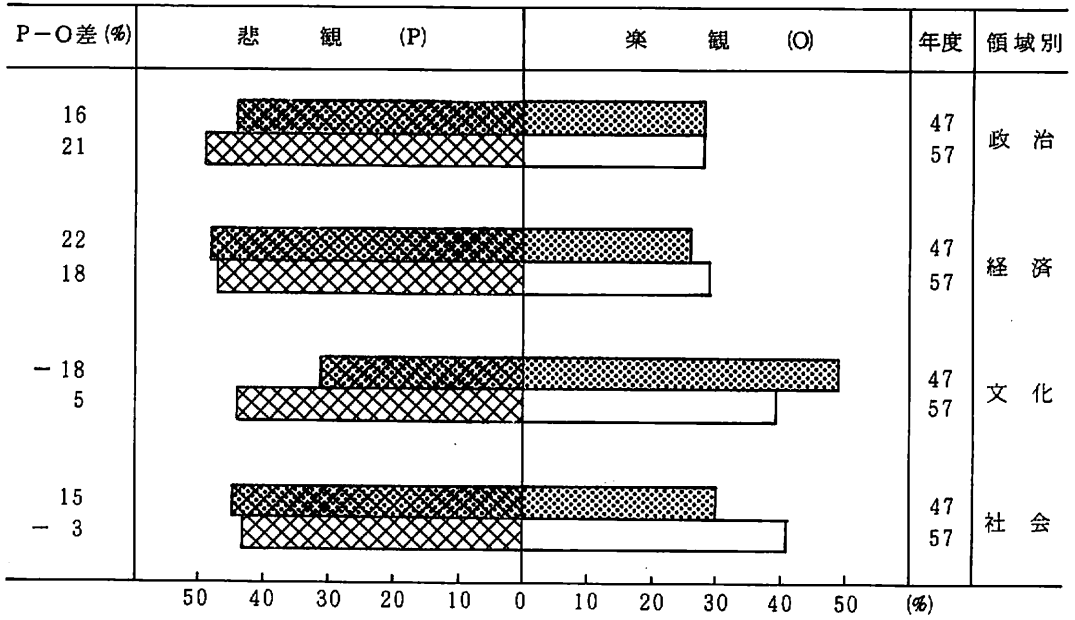


図34 戦争不安の領域別に見た年度間比較

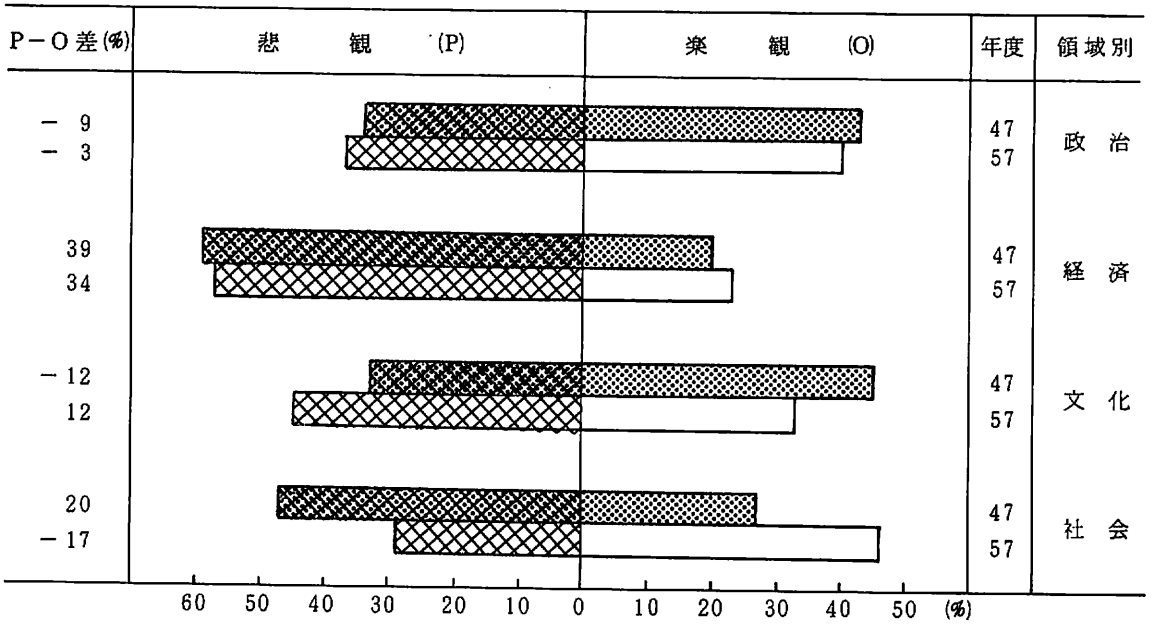


図35 自治不安の領域別に見た年度間比較

られるものの、他の各領域においては同様に楽観的方向へ変化している。その中で、特に経済領域における悲観値、楽観値、P-O差等の変化は大きい。

次に、3種類の不安について各年齢別にまとめた結果について、前回と今回とで比較検討する。

戦争不安(図37)について見ると、20歳未満の若年層と60歳以上の高年齢層は、P-O差の結果の比較から若干楽観的方向に変化している。これに対して、20代から50代にかけては悲観的方向に変化し、その中で40代の変化が最も大きい。戦争不安の3対象に関して(表16)、最も大きな変化が

見られるのは対沖縄についてである。対沖縄について、すべての年齢層のP-O差の結果を比較すると、大幅に増加し悲観的態度に転じている。反面、対米国に関してはほとんどの年齢層において楽観的態度に変化している。表17の戦争不安の各

領域において、顕著な変化が見られるのは文化の領域である。文化領域の各年齢層において、P-O差の値が今回増加して、大幅に悲観的方向に変化している。特に、20代、40代、50代において変化が大きい。また、社会領域において40代、50代

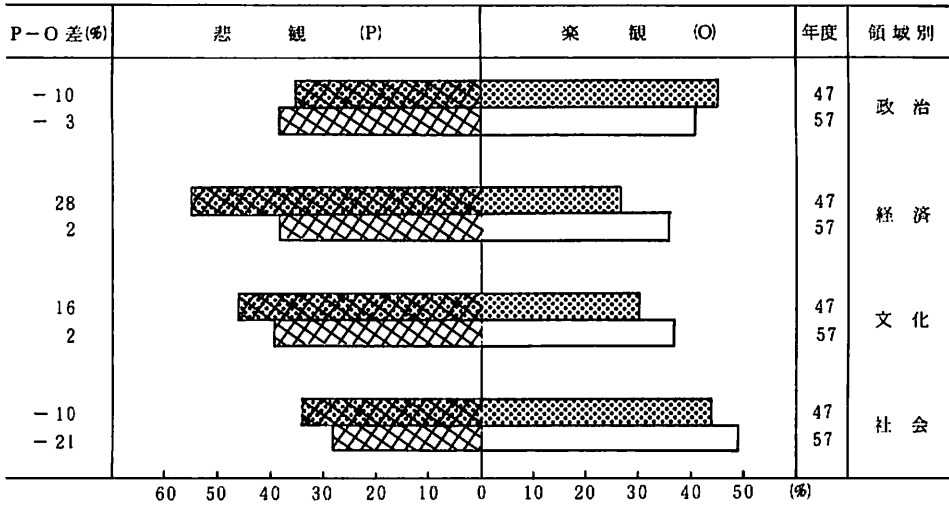


図 36 人権不安の領域別にみた年度間比較

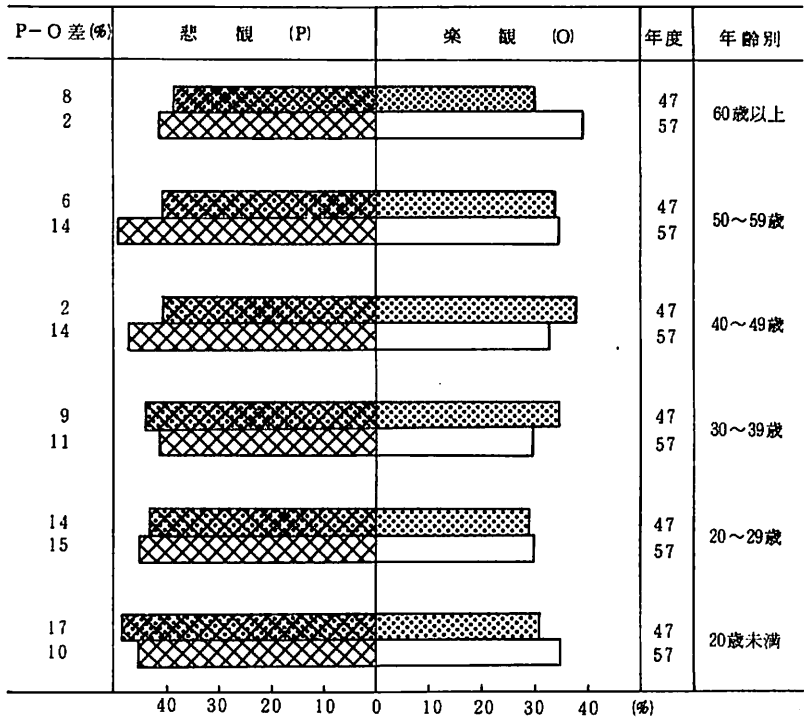


図 37 戦争不安の年齢別にみた年度間比較



表16 種類別、対象別にみた不安の年齢別年度間比較

種類	対象	年齢別 年度	20歳未満		20~29歳		30~39歳		40~49歳		50~59歳		60歳以上	
			悲	楽	悲	楽	悲	楽	悲	楽	悲	楽	悲	楽
戦争不安	対日本	47	45	35 (10)	49	29 (20)	48	31 (17)	45	33 (12)	43	31 (12)	39	28 (11)
		57	54	31 (23)	51	29 (22)	45	30 (15)	51	31 (20)	54	33 (21)	37	47 (-10)
	対沖縄	47	48	37 (11)	37	39 (-2)	40	44 (-4)	33	47 (-14)	34	46 (-12)	26	43 (-17)
		57	48	33 (15)	47	31 (16)	43	32 (11)	48	35 (13)	47	36 (11)	41	41 (0)
	対米国	47	52	23 (29)	44	25 (19)	45	29 (16)	40	33 (7)	43	26 (17)	47	21 (26)
		57	34	48 (-14)	37	33 (4)	36	29 (7)	41	33 (8)	46	37 (9)	46	29 (17)
自治不安	対日本	47	60	20 (40)	52	24 (28)	48	27 (21)	48	31 (17)	47	28 (19)	35	28 (7)
		57	47	31 (16)	47	30 (17)	49	22 (27)	51	28 (23)	53	32 (21)	29	49 (-20)
	対沖縄	47	40	34 (6)	42	34 (8)	48	35 (13)	48	37 (11)	51	35 (16)	55	25 (30)
		57	43	39 (4)	43	31 (12)	44	30 (14)	47	36 (11)	51	35 (16)	52	31 (21)
	対米国	47	33	41 (-8)	29	39 (-10)	35	45 (-10)	32	45 (-13)	33	42 (-9)	38	34 (4)
		57	32	46 (-14)	34	39 (-5)	30	36 (-6)	34	42 (-8)	38	44 (-6)	29	39 (-10)
人権不安	対日本	47	48	40 (8)	27	44 (-17)	40	40 (0)	39	41 (-2)	40	41 (-1)	33	39 (-6)
		57	37	47 (-10)	35	40 (-5)	34	42 (-8)	34	46 (-12)	35	50 (-15)	31	56 (-25)
	対沖縄	47	47	39 (8)	36	40 (-4)	45	36 (9)	43	42 (1)	43	40 (3)	39	35 (4)
		57	41	38 (3)	43	31 (12)	43	34 (9)	42	40 (2)	43	45 (-2)	28	44 (-16)
	対米国	47	49	34 (15)	44	26 (18)	48	31 (17)	51	32 (19)	48	33 (15)	46	25 (21)
		57	31	40 (-9)	28	32 (-4)	31	33 (-2)	36	38 (-2)	43	41 (2)	28	42 (-14)

以外の各年齢層が楽観的方向に変化している。自治不安の年齢別比較の結果(図38)から、時系列に最も変化が見られるのは20歳未満と60歳以上の年齢層である。両年齢層とも一様に楽観的方向に変化している。他の年齢層では、前回と今回とでそう大幅な変動は見られない。表16の自治不安の3対象に関して、変動が見られるのは対日本の20歳未満、20代、60歳以上である。これらの年齢層においては、今回悲観値は減少し、楽観値が増加して大幅に楽観的方向に変化している。対日本の30代、40代、50代では大幅な変化は見られない。対沖縄、

米国の各年齢層においても大きな変動は見られない。表17の自治不安の各領域に関する結果から、前回と今回との間で最も変化が大きく現われているのは文化と社会の領域である。文化の領域において、各年齢層ともP-O差の比較から悲観的方向へ大幅に変化していることが認められる。また、逆に社会の領域においては各年齢層とも楽観的方向へ変化している。とりわけ、60歳以上の変化は顕著である。人権不安(図39)の年齢別結果の比較から、20代以外の各年齢層においては一様に楽観的方向へ変化している。中でも60歳以上の層で

表 17 種類別、領域別にみた不安の年齢別年度間比較

種類	領域	年齢別		20歳未満		20～29歳		30～39歳		40～49歳		50～59歳		60歳以上	
		反応カテゴリー	年度	悲	楽	悲	楽	悲	楽	悲	楽	悲	楽	悲	楽
戦争不安	政治	47	50 (20)	30 (20)	50 (25)	25 (25)	47 (21)	26 (21)	42 (11)	31 (11)	44 (15)	29 (15)	30 (4)	26 (4)	
		57	54 (28)	26 (28)	50 (26)	24 (26)	43 (15)	28 (15)	52 (25)	27 (25)	53 (20)	33 (20)	39 (10)	29 (10)	
	経済	47	49 (26)	23 (26)	56 (33)	23 (33)	48 (20)	28 (20)	45 (15)	30 (15)	45 (20)	25 (20)	43 (17)	26 (17)	
		57	50 (14)	36 (14)	51 (26)	25 (26)	42 (19)	23 (19)	49 (20)	29 (20)	47 (14)	33 (14)	44 (14)	50 (14)	
	文化	47	41 (-3)	44 (-3)	24 (-27)	51 (-27)	32 (-20)	52 (-20)	29 (-25)	54 (-25)	28 (-21)	49 (-21)	33 (-8)	41 (-8)	
		57	46 (10)	36 (10)	43 (10)	33 (10)	40 (4)	36 (4)	43 (4)	39 (4)	49 (8)	41 (8)	45 (-1)	46 (-1)	
	社会	47	52 (24)	28 (24)	43 (19)	24 (19)	50 (20)	30 (20)	42 (6)	36 (6)	42 (8)	34 (8)	43 (13)	30 (13)	
		57	31 (-20)	51 (-20)	34 (-8)	42 (-8)	39 (6)	33 (6)	43 (7)	36 (7)	47 (12)	35 (12)	36 (-12)	48 (-12)	
	自治不安	政治	47	41 (4)	37 (4)	32 (-17)	49 (-17)	35 (-8)	43 (-8)	33 (-14)	47 (-14)	31 (-13)	44 (-13)	32 (-4)	36 (-4)
			57	33 (-11)	44 (-11)	41 (7)	34 (7)	33 (-2)	35 (-2)	38 (-4)	42 (-4)	43 (-1)	44 (-1)	31 (-7)	38 (-7)
経済		47	66 (46)	20 (46)	56 (38)	18 (38)	57 (33)	24 (33)	58 (33)	25 (33)	61 (42)	19 (42)	58 (43)	15 (43)	
		57	56 (27)	29 (27)	50 (22)	28 (22)	58 (41)	17 (41)	62 (41)	21 (41)	65 (44)	21 (44)	48 (25)	23 (25)	
文化		47	32 (-9)	41 (-9)	31 (-10)	41 (-10)	33 (-13)	46 (-13)	32 (-17)	49 (-17)	32 (-17)	49 (-17)	35 (-8)	43 (-8)	
		57	48 (13)	35 (13)	45 (15)	30 (15)	40 (9)	31 (9)	41 (4)	37 (4)	43 (3)	40 (3)	54 (28)	26 (28)	
社会		47	37 (8)	29 (8)	44 (21)	23 (21)	47 (19)	28 (19)	48 (18)	30 (18)	50 (22)	28 (22)	54 (31)	23 (31)	
		57	25 (-22)	47 (-22)	30 (-11)	41 (-11)	32 (-3)	35 (-3)	36 (-4)	40 (-4)	38 (-5)	43 (-5)	12 (-59)	71 (-59)	
人権不安		政治	47	49 (11)	38 (11)	23 (-33)	56 (-33)	39 (-3)	42 (-3)	37 (-10)	47 (-10)	36 (-9)	45 (-9)	24 (-17)	41 (-17)
			57	40 (0)	40 (0)	39 (8)	31 (8)	36 (-3)	39 (-3)	39 (-4)	43 (-4)	43 (-1)	44 (-1)	32 (-14)	46 (-14)
	経済	47	52 (17)	35 (17)	49 (21)	28 (21)	60 (34)	26 (34)	59 (34)	25 (34)	61 (35)	26 (35)	50 (26)	24 (26)	
		57	38 (-4)	42 (-4)	41 (15)	26 (15)	41 (12)	29 (12)	44 (10)	34 (10)	44 (5)	39 (5)	19 (-27)	48 (-27)	
	文化	47	53 (24)	29 (24)	42 (19)	23 (19)	48 (19)	29 (19)	46 (13)	33 (13)	46 (15)	31 (15)	43 (9)	34 (9)	
		57	36 (-5)	41 (-5)	39 (6)	33 (6)	39 (9)	30 (9)	40 (5)	35 (5)	46 (7)	39 (7)	33 (-12)	45 (-12)	
	社会	47	38 (-8)	46 (-8)	28 (-11)	39 (-11)	32 (-15)	47 (-15)	35 (-13)	48 (-13)	32 (-17)	49 (-17)	41 (7)	34 (7)	
		57	32 (-11)	43 (-11)	23 (-22)	45 (-22)	27 (-18)	45 (-18)	27 (-26)	53 (-26)	29 (-29)	58 (-29)	31 (-19)	50 (-19)	

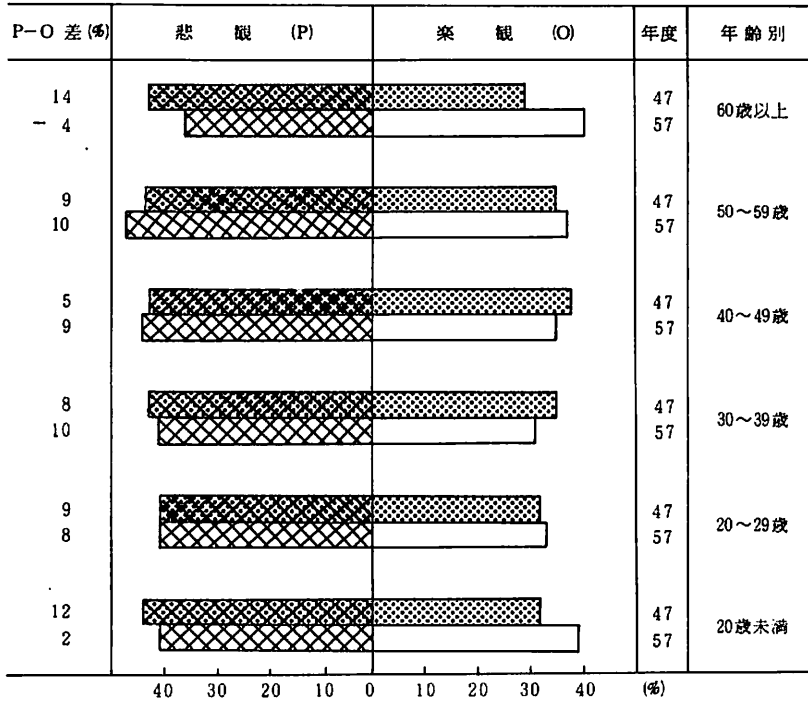


図 38 自治不安の年齢別にみた年度間比較

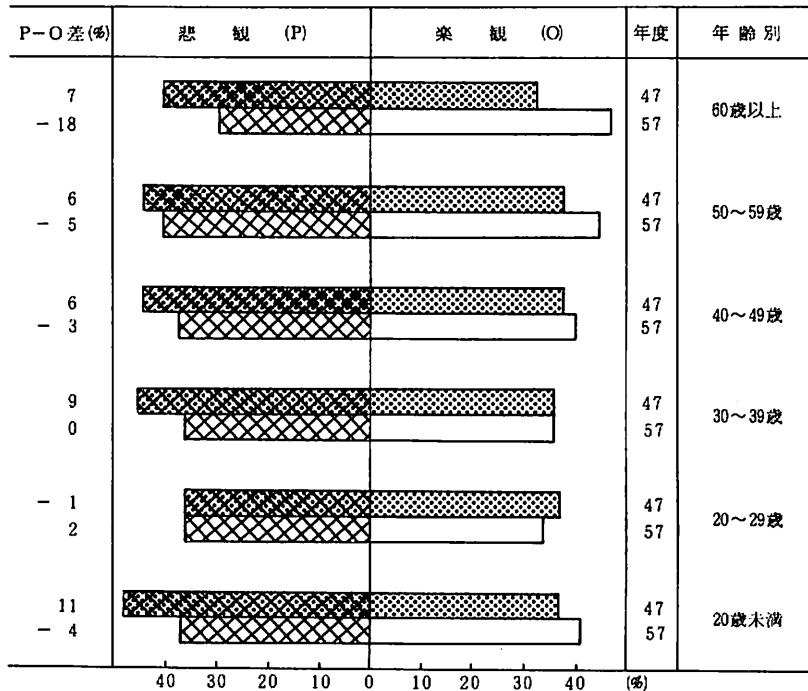


図 39 人権不安の年齢別にみた年度間比較

の変化が大きい。表16の人権不安の3対象に関して、最も大きな変化が見られるのは対米国についてである。対米国に関する各年齢層において、P-O差が減少して楽観的方向へ変化している。中でも60歳以上の層での変化が激しい。また、表17の人権不安の各領域に関して見ると、まず政治領域の20代において前回大幅に楽観的傾向を示していたのが、今回悲観的方向へ変化している。経済領域の50代、60歳以上が楽観的方向へ、同様に文化領域の20歳未満と60歳以上がそれぞれ楽観的方向へ転じている。さらに、社会領域の各年齢層において、今回楽観的方向へ変化している。

次に3種類の不安について、支持政党別に前回と今回の結果を整理し比較検討する。戦争不安の結果(図40)から、保守は今回悲観的方向へ変化

しているが、依然として楽観的傾向を留めている。逆に、革新は楽観的方向へ転じている。また表18の戦争不安の3対象に関する結果から、保守は対沖縄に関して大幅に悲観的方向へ転じている。一方、革新は対米国に関して、今回の結果ではかなり楽観的態度に変化していることが認められる。戦争不安の4領域に関する結果(表19)から、経済と社会の領域において保守は悲観的方向へ変化しているのに対して、逆に革新は楽観的方向へ変化している。また、文化の領域においては保守、革新とも同様に悲観的方向へ変化しているが、変化量は革新の方が大きい。自治不安の結果(図41)を見ると、保守、革新とも前回と今回との間でほとんど変化は見られない。表18の自治不安の3対象に関する結果から、保守が対日本に関して悲観

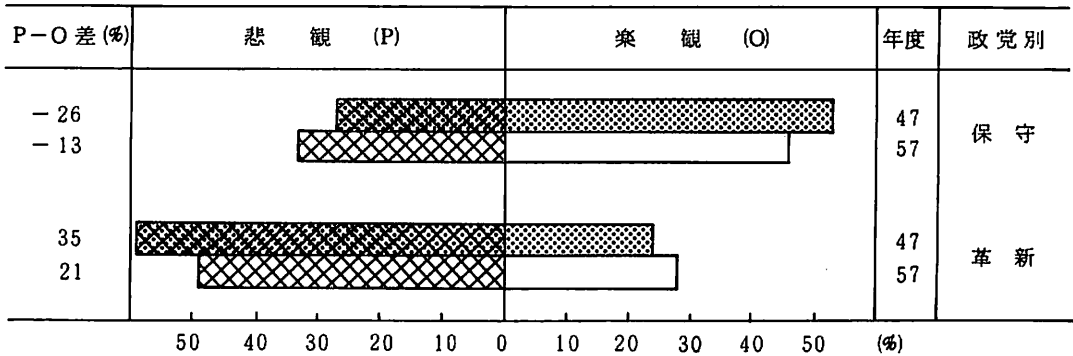


図40 戦争不安の政党別にみた年度間比較

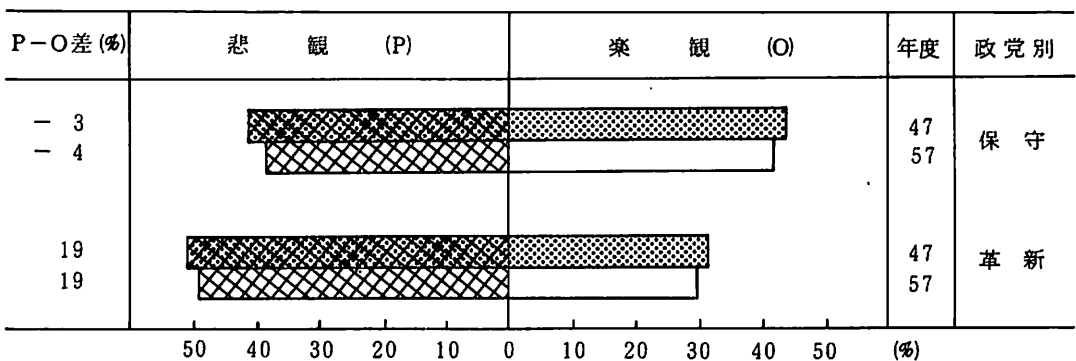


図41 自治不安の政党別にみた年度間比較

的方向へ、対沖縄に関して楽観的方向へそれぞれ変化しているのに対して、革新は3対象に関してほとんど変化は見られない。自治不安の4領域に関する結果(表19)から、政治と文化の領域にお

いて保守、革新とも悲観的方向へ変化している、しかし保守は政治領域において変化量が大きく、革新は文化の領域においての変化量が大きい。また、社会の領域においては保守、革新とも楽

観的方向へ変化し、その変化量は保守の方が大きい。次に人権不安の結果(図42)から、保守、革新とも前回に比べ今回は、楽観的方向へ変化している。また両群の変化量の値もほぼ同程度である。表18の人権不安の3対象に関する結果から、最も大きな変化が見られるのは対米国に対する態度である。対米国に対して、保守、革新とも顕著に楽観的態度に変化しているのである。表19の人権不安の4領域に関する結果から、すべての領域において保守、革新とも楽観的方向へ変化している。その中で、政治の領域においては保守の変化量が革新のそれを上回り、他の経済、文化、社会の領域においては革新の変化量が保守のそれを上回っている。

表 18 種類別、対象別にみた不安の政党別年度間比較

種類	対象	政 党 別		保 守		革 新	
		反 応 年 度	カ テ ゴ リ	悲 楽	悲 楽	悲 楽	悲 楽
戦 争 不 安	対 日 本	47	33 48	63 22	(-15)	(41)	
		57	29 45	64 26	(-16)	(38)	
	対 沖 縄	47	21 65	53 33	(-44)	(20)	
		57	35 46	54 32	(-11)	(22)	
	対 米 国	47	27 47	61 19	(-20)	(42)	
		57	29 46	49 26	(-17)	(23)	
自 治 不 安	対 日 本	47	37 43	63 23	(-6)	(40)	
		57	48 33	56 19	(15)	(37)	
	対 沖 縄	47	51 38	49 35	(13)	(14)	
		57	42 45	48 33	(-3)	(15)	
	対 米 国	47	30 52	42 40	(-22)	(2)	
		57	25 49	42 37	(-24)	(5)	
人 権 不 安	対 日 本	47	37 49	43 38	(-12)	(5)	
		57	33 54	41 37	(-21)	(4)	
	対 沖 縄	47	37 51	49 34	(-14)	(15)	
		57	34 48	51 34	(-14)	(17)	
	対 米 国	47	42 31	69 19	(11)	(50)	
		57	24 56	39 34	(-32)	(5)	

表 19 種類別、領域別にみた不安の政党別年度間比較

種類	領域	政 党 別		保 守		革 新		
		反 応 年 度	カ テ ゴ リ	悲 楽	悲 楽	悲 楽	悲 楽	
戦 争 不 安	政 治	47	25 51	69 14	(-26)	(55)		
		57	28 51	63 18	(-23)	(45)		
	経 済	47	31 48	67 15	(-17)	(52)		
		57	35 26	60 22	(9)	(38)		
	文 化	47	20 64	39 47	(-44)	(-8)		
		57	34 51	54 31	(-27)	(23)		
	社 会	47	31 49	62 21	(-18)	(41)		
		57	34 46	46 32	(-12)	(14)		
	自 治 不 安	政 治	47	26 55	44 40	(-29)	(4)	
			57	34 43	46 36	(-9)	(10)	
		経 済	47	49 35	73 13	(14)	(60)	
			57	48 33	68 14	(15)	(54)	
文 化		47	31 53	38 45	(-22)	(-7)		
		57	42 45	48 31	(-3)	(17)		
社 会		47	50 34	50 31	(16)	(19)		
		57	29 47	42 37	(-18)	(5)		
人 権 不 安		政 治	47	37 47	48 36	(-10)	(12)	
			57	20 64	46 35	(-44)	(11)	
		経 済	47	48 37	71 17	(11)	(54)	
			57	35 47	53 27	(-12)	(26)	
	文 化	47	42 41	57 24	(1)	(33)		
		57	38 41	44 29	(-3)	(15)		
社 会	47	30 50	40 43	(-20)	(-3)			
	57	28 57	30 48	(-29)	(-18)			

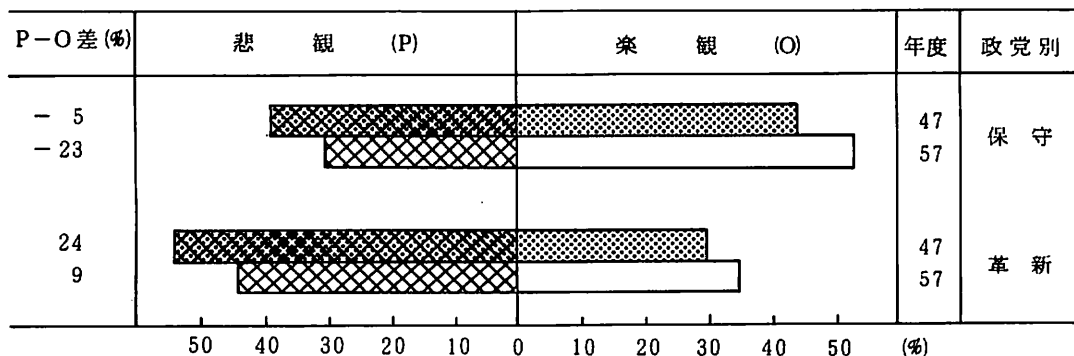


図 42 人権不安の政党別にみた年度間比較

これまで結果を詳細に分析してきたが、結果を要約するとおおよそ以下のとおりである。まず3種類の不安の中で、47年度に比べ57年度に最も大きく変化したのは人権不安の好転である。特に対米国に関して楽観的態度に変化し、また経済、文化、社会の各領域においても一様に楽観的方向に変化している。戦争不安の場合、対象及び領域をこみにした結果からは47年度と57年度との間にほとんど変化は見られない。しかしながら対象別に見ると対沖縄に関して悲観的態度へ、対米国に関しては楽観的態度へそれぞれ変化している。領域別には文化の領域で悲観的方向へ、社会の領域では楽観的方向へそれぞれ変化している。自治不安は3対象に関して、年度間に大幅な変化は見られない、しかしながら領域別には文化の領域で悲観的方向へ、逆に社会の領域では楽観的方向へ顕著に変化している。

次に種類及び対象別の観点から、年齢別比較の

結果を見ると、年度間のP-O差の絶対値の比較から、20代～30代の若年齢層と60歳以上の高齢層は人権不安の対米国に関して、楽観的態度への変化が最も大きい。これに対し、40代～50代の年齢層は戦争不安の対沖縄に関して、悲観的態度への変化が最も大きいのである。また種類及び領域別の観点から、自治不安の経済領域においてどの年齢層も概ね悲観値が高く、楽観値は低くなって、全体的に47年度と同様に10年後にも変動が少なく依然として悲観的傾向のままで留まっている。

また支持政党別の年度間比較から、特に戦争不安において保守は悲観的方向へ変化しているのに対し、革新は楽観的方向へ変化しているのである。復帰後10年間で保守はいわゆる革新化現象を示し、他方革新は保守化現象を示し、興味ある結果を現わしている。さらに保守のこの悲観的態度は沖縄に向けられ、革新の楽観的態度は米国に向けられているのである。

【付表】 調査用紙と応答分布(%)

- あなたは、復帰に伴って自衛隊が沖縄に配備されたために、かえって戦争の危険性が高まったと思いますか。
  - イ 高まったと思う。
  - ロ 高まったと思わない。
  - ハ どちらともいえない。
- アジアにおける日本の役割は年々大きくなっていますが、あなたは、そのためにアジア諸国との緊張や利害の対立が年々強まっていくと思いますか。
  - イ 強まっていくと思う。
  - ロ 強まっていくと思わない。
  - ハ どちらともいえない。

S. 47			S. 57		
一般			一般		
男	女	計	男	女	計
43	55	49	46	46	46
32	19	26	39	29	34
25	26	25	15	24	20
57	57	57	62	55	58
21	13	18	21	15	18
22	29	25	17	30	24

- 3 あなたは、軍事基地があるために、沖縄がアジアにおける将来の国際紛争にまきこまれると思いますか。
- イ まきこまれると思う。  
 ロ まきこまれると思わない。  
 ハ どちらともいえない。
- 4 あなたは、現在、戦争の危険性が年々高まりつつあると肌身に感じますか。
- イ 感じる。  
 ロ 感じない。  
 ハ どちらともいえない。
- 5 あなたは、日米安保条約が日本の平和と安全に役立っていると思いますか。
- イ 役立っていると思う。  
 ロ 役立っていると思わない。  
 ハ どちらともいえない。
- 6 あなたは、復帰後、米国が沖縄の基地を自由に使って、外国を攻撃することはむずかしくなったと思いますか。
- イ むずかしくなったと思う。  
 ロ むずかしくなったと思わない。  
 ハ どちらともいえない。
- 7 あなたは、ほかの都道府県自治体の自治権は、沖縄県における自治権に比べて、大幅に認められていると思いますか。
- イ 認められていると思う。  
 ロ 認められていると思わない。  
 ハ どちらともいえない。
- 8 あなたは、日本の政治には少数意見や地方住民の意思がじゅうぶんに反映されていると思いますか。
- イ 反映されていると思う。  
 ロ 反映されていると思わない。  
 ハ どちらともいえない。
- 9 あなたは、将来日本政府が、県民の意思を無視して、沖縄を再び外国の施政権下に置く可能性があると思いますか。
- イ 可能性があると思う。  
 ロ 可能性があると思わない。  
 ハ どちらともいえない。

S. 47			S. 57		
一 般			一 般		
男	女	計	男	女	計
50	49	50	57	54	55
17	17	17	17	16	17
33	34	33	26	30	28
35	46	40	52	54	53
35	30	33	33	25	29
30	24	27	15	21	18
36	25	31	46	35	40
43	41	42	32	30	31
21	34	27	22	36	29
41	43	42	30	30	30
35	34	35	50	42	46
24	22	23	20	27	24
48	50	49	29	34	31
23	23	23	36	28	32
29	27	28	36	38	37
14	10	12	19	10	14
63	71	67	67	74	71
23	19	21	14	16	15
15	18	17	19	26	23
58	56	57	60	52	56
27	26	26	20	22	21

名城・東江(東)・東江(平)・中村・富永・島袋：復帰不安の研究Ⅱ<sup>(1)</sup>

S. 47

S. 57

10 あなたは、県民の利益を守るためには、沖縄は日本の一地方県として吸収されるよりも、特別自治体として復帰すべきだったと思いますか。

- イ 特別自治体として復帰すべきだったと思う。
- ロ 特別自治体として復帰すべきだったと思わない。
- ハ どちらともいえない。

11 あなたは、米国の軍事基地が復帰後も存続したことによって、沖縄住民の自治権が侵害されていると思いますか。

- イ 侵害されていると思う。
- ロ 侵害されていると思わない。
- ハ どちらともいえない。

12 復帰前、米国の施政下で、沖縄住民の自治権が、次第に拡大されたのは、住民の自治を要求する大衆運動のためだったとあなたは思いますか。

- イ そうだったと思う。
- ロ そうだったと思わない。
- ハ どちらともいえない。

13 あなたは、言論、出版、集会、集団行動などの自由は、復帰前と比べて、より制限されていると思いますか。

- イ 制限されていると思う。
- ロ 制限されていると思わない。
- ハ どちらともいえない。

14 あなたは、復帰後日本政府は、沖縄の人々の生活を安定させ、差別をなくすように努力してきたと思いますか。

- イ 努力してきたと思う。
- ロ 努力してきたと思わない。
- ハ どちらともいえない。

15 あなたは、沖縄の人々が生命の安全、財産の保障などの基本的人権をじゅうぶん主張してきたと思いますか。

- イ 主張してきたと思う。
- ロ 主張してきたと思わない。
- ハ どちらともいえない。

16 あなたは、復帰後、社会的に高い地位は本土の人々によって占められるようになったと思いますか。

- イ 占められるようになったと思う。
- ロ 占められるようになったと思わない。
- ハ どちらともいえない。

一 般			一 般		
男	女	計	男	女	計
31	33	32	29	25	27
47	45	46	46	38	42
22	22	22	24	37	31
53	48	51	58	54	56
29	27	28	29	22	25
18	25	21	12	24	19
75	68	72	69	61	65
7	14	10	14	11	12
18	18	18	17	28	22
36	47	41	20	19	20
43	32	38	62	55	58
21	21	21	18	26	22
50	45	48	58	47	52
25	27	26	25	32	29
25	28	26	16	21	19
55	51	53	55	37	45
29	37	33	29	41	35
16	12	14	16	22	19
30	35	32	58	58	58
47	47	47	25	20	23
24	18	21	16	21	19



S. 47

S. 57

17 あなたは、復帰後も米国の軍事優先の政策によって、沖縄住民の人権が侵害されてきたと思いますか。

- イ 侵害されてきたと思う。
- ロ 侵害されてきたと思わない。
- ハ どちらともいえない。

18 あなたは、米国の軍人や軍属による犯罪は、かれらが沖縄住民を劣等な人間と考えているためだと思いますか。

- イ そうだと思う。
- ロ そうだと思わない。
- ハ どちらともいえない。

19 あなたは、日本の大企業が、次第に軍事産業に手をのぼしつつあると思いますか。

- イ 手をのぼしつつあると思う。
- ロ 手をのぼしつつあるとは思わない。
- ハ どちらともいえない。

20 日本の経済は最近東南アジア諸国に大きく進出しつつありますが、あなたはそのために日本に対する反感が強まると思いますか、それとも友好関係が強まると思いますか。

- イ 反感が強まると思う。
- ロ 友好関係が強まると思う。
- ハ どちらともいえない。

21 あなたは、本土の大企業を誘致すると、沖縄が東南アジアへの経済的進出の拠点として利用され、そのため国際紛争にまきこまれるおそれがあると思いますか。

- イ そのおそれがあると思う。
- ロ そういうおそれはないと思う。
- ハ どちらともいえない。

22 あなたは基地に代わる産業ができるまでまつのではなくて、まず基地を撤廃してその後に基地に代わる平和産業を確立すべきだと思いますか。

- イ その通りだと思う。
- ロ 順序を逆にすべきだと思う。
- ハ どちらともいえない。

23 あなたは、米国の企業や米国資本との共同出資による企業が誘致された場合、沖縄の人の権利は十分保障されると思いますか。

- イ 保障されると思う。
- ロ 保障されないと思う。
- ハ どちらともいえない。

一 般			一 般		
男	女	計	男	女	計
77	73	75	56	55	55
10	10	10	28	23	25
13	17	15	16	22	20
52	56	53	35	32	33
36	26	32	48	43	45
12	18	15	17	25	21
59	58	59	62	48	55
14	12	13	20	23	22
26	30	27	18	29	23
25	30	27	49	41	45
41	38	40	27	26	26
34	32	33	24	33	29
28	36	32	27	34	31
41	35	38	52	35	43
31	28	30	21	31	26
56	65	61	56	52	54
31	22	26	25	19	22
13	13	13	20	29	24
37	41	39	33	16	24
35	32	34	36	43	39
28	26	27	32	41	37

	S. 47			S. 57		
	一 般			一 般		
	男	女	計	男	女	計
24 あなたは、米国の経済は軍事産業によって支えられている面が大きいと思いますか。						
イ 大きいと思う。	51	54	52	51	41	46
ロ 大きいとは思わない。	22	14	19	29	25	27
ハ どちらともいえない。	27	32	29	20	33	27
25 あなたは、沖縄の経済を豊かにするためには、今後も米軍基地が存続して基地収入があった方がよいと思いますか。						
イ その方がよいと思う。	21	20	21	29	20	25
ロ その方がよいとは思わない。	58	68	63	51	50	51
ハ どちらともいえない。	20	12	16	19	29	25
26 日本は今日GNP世界第2位となり、経済大国になったといわれますが、あなたは、その富がすべての国民の経済生活に反映され、人々の生活を豊かにしていると思いますか、それとも一部の人のものになっていると思いますか。						
イ 国民の経済生活を豊かにしていると思う。	35	24	30	34	20	27
ロ 一部の人のものになっていると思う。	49	57	53	53	58	55
ハ どちらともいえない。	16	19	18	13	22	18
27 今後本土企業が沖縄に進出してくると、あなたは、それが沖縄経済の発展に役立つと思いますか、それとも沖縄を経済的に搾取すると思いますか。						
イ 発展に役立つと思う。	50	38	44	40	29	34
ロ 搾取すると思う。	19	33	26	40	45	42
ハ どちらともいえない。	31	29	30	21	26	23
28 あなたは、沖縄県民の利益を守るために、今後県内産品を愛用すべきだと思いますか。						
イ 愛用すべきだと思う。	79	80	79	84	83	84
ロ 愛用する必要はないと思う。	9	10	10	6	6	6
ハ どちらともいえない。	12	9	11	10	11	11
29 あなたは、沖縄の企業は、今後も当分の間保護していくべきだと思いますか。						
イ 保護すべきだと思う。	86	83	84	82	77	79
ロ 保護する必要はないと思う。	7	9	8	8	8	8
ハ どちらともいえない。	8	9	8	10	15	13
30 アメリカはベトナム戦争などに莫大な費用を使い、国の経済を脅かす結果を招いたが、あなたは、それは一部の資本家や政治家が、国民の意思を無視したためだと思いますか。						
イ そう思う。	57	65	61	58	53	56
ロ そうは思わない。	17	13	15	23	20	22
ハ どちらともいえない。	26	22	24	18	27	23

S. 47

S. 57

31 大型の米国系企業が沖縄に進出すると、それらの企業は沖縄の開発に役立つと思いますか、それともそれは企業だけの利益にしかならないと思いますか。

- イ 開発に役立つ。
- ロ 企業だけの利益にしかならない。
- ハ どちらともいえない。

32 あなたは、日本における公害は、国の経済的発展のためにはやむえないことだと思いますか。

- イ やむをえないと思う。
- ロ やむをえないとは思わない。
- ハ どちらともいえない。

33 あなたは、今後も政府の援助により、沖縄の産業は開発され、県民の生活水準は次第に高まっていくと思いますか。

- イ 高まっていくと思う。
- ロ 高まっていくとは思わない。
- ハ どちらともいえない。

34 あなたは、外国の資本や本土の大企業を誘致することは、一部の人だけの利益になるのではなく、沖縄の住民一般の生活を豊かにすると思いますか。

- イ 豊かにすると思う。
- ロ 豊かにするとは思わない。
- ハ どちらともいえない。

35 あなたは、復帰後本土の会社や商人がはいりこんできたため、沖縄の中小企業や基地依存の業者は、対等に競争してやっていけなくなったと思いますか。

- イ 対等にやっていけたと思う。
- ロ 対等にやっていけなかったと思う。
- ハ どちらともいえない。

36 あなたは、米軍基地やアメリカ商社で働いている沖縄の人は、技術や能力はあっても、沖縄の人であるために、賃金は安く、その他不利な扱いを受けていると思いますか。

- イ その通りだと思う。
- ロ その通りだと思わない。
- ハ どちらともいえない。

37 あなたは、復帰後の教育の流れからして、今後ますます戦前のような国土防衛、戦争肯定の教育が強調されるおそれがあると思いますか。

- イ そのおそれがあると思う。
- ロ そのおそれはないと思う。
- ハ どちらともいえない。

一 般			一 般		
男	女	計	男	女	計
27	20	24	26	20	23
44	53	48	50	49	50
29	28	28	24	31	28
15	15	15	24	28	26
72	78	75	64	58	61
13	7	10	12	14	13
50	41	46	54	38	46
19	34	26	27	33	30
30	24	28	20	28	24
52	43	49	42	31	37
26	42	33	38	42	40
21	15	18	20	27	24
6	8	7	27	21	24
80	76	78	55	57	56
14	16	15	18	22	20
66	66	66	40	28	34
19	20	20	39	38	38
15	15	15	21	34	28
34	43	38	47	37	42
43	39	41	39	35	37
23	18	21	14	29	21

38 あなたは、日本の歴史や文化をみた時に、日本人は元来戦争を好む民族だと思いますか、それとも平和を愛する民族だと思いますか。

- イ 戦争を好む民族だと思う。
- ロ 平和を愛する民族だと思う。
- ハ どちらともいえない。

39 あなたは、戦争をテーマにしたテレビや映画をみる時、どんな気持ちになりますか。

- イ 戦争はいやだと思う。
- ロ カッコイイと思う。
- ハ わからない。

40 沖縄の人々は平和を愛する気持ちが強いといわれますが、あなたは、そのような気持は戦争を防ぐ力になると思いますか。

- イ 防ぐ力になると思う。
- ロ 防ぐ力にはならないと思う。
- ハ どちらともいえない。

41 一般に米国人は極度に共産主義を危険視し、嫌う傾向がありますが、あなたは、このことが戦争の危険性を大きくしていると思いますか。

- イ 危険性を大きくしていると思う。
- ロ 危険性を大きくしているとは思わない。
- ハ どちらともいえない。

42 あなたは、米国人が自国の単なる名誉やメンツを守るために、戦争をはじめるおそれがあると思いますか。

- イ そういうおそれがあると思う。
- ロ そういうおそれはないと思う。
- ハ どちらともいえない。

43 あなたは、日本では中央の文化を押しつけることに熱心で、地方の文化を尊重しないと思いますか。

- イ 尊重していないと思う。
- ロ 尊重していると思う。
- ハ どちらともいえない。

44 あなたは、日本人は自国のものよりも欧米の芸術や学問、思想をよりすぐれたものとみる傾向があると思いますか。

- イ そういう傾向があると思う。
- ロ そういう傾向はないと思う。
- ハ どちらともいえない。

S. 47			S. 57		
一 般			一 般		
男	女	計	男	女	計
40	35	38	36	26	31
34	41	37	41	52	47
26	23	25	23	22	22
94	98	96	92	93	93
2	1	1	3	2	2
4	1	2	5	5	5
79	79	79	73	67	70
11	12	11	16	17	17
10	9	10	11	16	14
57	37	47	43	31	37
15	30	23	33	30	32
27	33	30	24	38	31
33	38	35	43	31	36
35	37	36	43	40	41
32	25	29	15	29	22
24	30	27	30	24	27
36	31	34	42	36	39
40	39	39	28	40	35
64	56	60	58	55	56
19	27	23	24	24	24
17	18	17	18	21	20

- 45 あなたは、方言は沖縄の文化(たとえば、琉歌、演劇など)の基礎となるものであるから、大いに保護、奨励すべきだと思いますか。
- イ そうすべきだと思う。
- ロ その必要はないと思う。
- ハ どちらともいえない。
- 46 あなたは、沖縄の人の中には、沖縄はつまらないところで、自分たちは弱い者だと考えている人が多いと思いますか。
- イ 多いと思う。
- ロ 多いと思わない。
- ハ どちらともいえない。
- 47 あなたは、戦後米軍援助による米国留学の制度がなかったならば、今日のような沖縄の文化的・社会的発展はみられなかったと思いますか。
- イ みられなかったと思う。
- ロ そんなことはないと思う。
- ハ どちらともいえない。
- 48 27年にわたる米国の統治によって、沖縄の人の生活様式は、かなりアメリカ化してきましたが、あなたは、それをよいことだと思いますか。
- イ よいことだと思う。
- ロ よいことだとは思わない。
- ハ どちらともいえない。
- 49 あなたは、沖縄の人が方言を使うと、本土の人は軽蔑的な目で見ると思いますか。
- イ 軽蔑的に見ると思う。
- ロ 軽蔑的に見ると思わない。
- ハ どちらともいえない。
- 50 あなたは、日本では義理人情とか恩とかがやかましくいわれていて、個人の自由意思や自主性が重んじられていないと思いますか。
- イ 重んじられていないと思う。
- ロ 重んじられていると思う。
- ハ どちらともいえない。
- 51 あなたは、沖縄の人は何か問題(たとえば災難、病気など)がおこると、ユタに相談することが多いと思いますか。
- イ 多いと思う。
- ロ 多いと思わない。
- ハ どちらともいえない。

S. 47			S. 57		
一 般			一 般		
男	女	計	男	女	計
62	54	58	86	82	84
19	26	22	6	6	6
19	20	20	7	12	10
31	34	32	25	29	27
58	56	57	58	54	56
11	10	11	17	17	17
26	33	29	33	29	31
57	57	57	50	44	47
17	10	14	17	27	22
38	34	36	37	33	35
34	42	37	26	20	23
28	25	26	37	47	42
32	34	33	26	24	25
49	41	45	56	54	55
19	26	22	17	22	20
33	35	34	38	35	37
34	49	42	36	32	34
33	16	24	26	33	30
60	62	61	71	75	73
27	22	25	19	14	17
13	16	14	10	10	10

- 52 あなたは、沖縄では誰でも平等に自分の能力をじゅうぶん伸ばすための教育を受けることができますか。
- イ できると思う。  
ロ できないと思う。  
ハ どちらともいえない。
- 53 米国は人権尊重の国だといわれていますが、あなたは、実際にアメリカ人の生活ややり方を見聞きして、確かにそうだと思いますか。
- イ 確かにそうだと思う。  
ロ むしろ反対だと思う。  
ハ どちらともいえない。
- 54 あなたは、戦後沖縄の郷土芸能・文化が盛んになってきたのは、米国が郷土文化を尊重したためだと思いますか。
- イ 尊重したためだと思う。  
ロ 尊重したためとは思わない。  
ハ どちらともいえない。
- 55 あなたは、日本では戦争を知らない若い世代の人たちがふえて、戦争反対の気持が次第にうすれてきていると思いますか。
- イ うすれてきていると思う。  
ロ うすれてきているとは思わない。  
ハ どちらともいえない。
- 56 あなたは、日本では自分のレジャーや家庭のことだけにうつつを抜き、戦争や平和について無関心な人が多くなっていると思いますか。
- イ 多くなっていると思う。  
ロ 多くなっているとは思わない。  
ハ どちらともいえない。
- 57 あなたは、沖縄では自衛隊に入隊しようとする者に対して、親類縁者あるいは知人が反対することが多いと思いますか。
- イ 反対することが多いと思う。  
ロ 反対することが多いとは思わない。  
ハ どちらともいえない。
- 58 あなたは、復帰後自衛隊が沖縄に配備されたため、沖縄の人で自衛隊に入隊したり、自衛隊に関係のある仕事に従事する人が多くなり、再び戦争の犠牲になる危険性が大きくなったと思いますか。
- イ その危険性が大きくなったと思う。  
ロ その危険性が大きくなったとは思わない。  
ハ どちらともいえない。

S. 47			S. 47		
一 般			一 般		
男	女	計	男	女	計
44	47	45	54	42	48
46	35	41	30	37	34
11	18	14	15	21	18
22	16	19	32	27	30
41	47	44	22	20	21
37	37	37	46	53	50
21	23	22	20	18	19
57	54	55	54	50	52
23	24	23	27	32	29
43	47	44	64	54	58
43	42	42	29	34	31
14	11	13	7	13	10
57	49	53	59	52	55
28	40	34	29	30	30
15	11	13	12	18	15
43	53	48	45	51	48
32	26	29	35	28	31
25	21	23	20	21	21
38	54	46	37	38	38
40	28	34	46	34	40
22	18	20	16	28	22

S. 47 S. 47

59 復帰後、多数のアメリカ軍人が沖縄の基地に残ったため、あなたは、過去の戦争の苦い思い出や将来の戦争に対する不安が消えていないと思いますか。

- イ 消えていないと思う。
- ロ そんなことはないと思う。
- ハ どちらともいえない。

60 あなたは、沖縄という一つの社会の中で、人種や文化などが大きくちがうアメリカ人と接触していくことによって、一般的にアメリカに対する国民感情はよくなると思いますか、それとも悪くなると思いますか。

- イ よくなると思う。
- ロ 悪くなると思う。
- ハ どちらともいえない。

61 あなたは、日本では他の国々と比べると、公明で正大な選挙が行なわれていると思いますか。

- イ 行なわれていると思う。
- ロ 行なわれているとは思わない。
- ハ どちらともいえない。

62 日本では消費者運動や公害反対運動などの市民運動がさかんに行なわれていますが、あなたは、こういったことは政治家や法律家・学者にまかせておいた方がよいと思いますか。

- イ そうだと思う。
- ロ そうだとは思わない。
- ハ どちらともいえない。

63 あなたは、沖縄の住民が自分たちの望むような社会を作るためには、政治や企業あるいはその他の面で本土と積極的に系列化していくべきだと思いますか。

- イ 系列化すべきだと思う。
- ロ 系列化しない方がよいと思う。
- ハ どちらともいえない。

64 あなたは、制度や習慣の面で本土と沖縄の間で差がある場合、できるだけ本土のものに近づけるよう努力すべきだと思いますか。

- イ 努力すべきだと思う。
- ロ 努力すべきではないと思う。
- ハ どちらともいえない。

65 あなたは、アメリカ人は政府に頼らないで、自分たちの問題は自分たちの手で解決しようとする性格が強いと思いますか。

- イ 強いと思う。
- ロ 強いと思わない。
- ハ どちらともいえない。

S. 47			S. 47		
一 般			一 般		
男	女	計	男	女	計
50	61	55	55	52	54
32	29	31	28	28	28
18	9	14	17	20	18
25	22	23	43	26	34
23	24	24	13	12	12
52	54	53	44	62	54
26	21	24	38	28	33
48	44	46	42	42	42
25	35	30	19	30	25
5	8	7	9	8	8
83	88	85	82	78	80
12	4	8	9	14	12
53	62	57	46	50	48
12	18	15	28	17	22
35	20	28	26	33	29
58	60	59	45	38	42
13	15	14	29	21	25
28	25	27	26	40	33
42	40	41	48	44	45
19	29	24	23	20	22
38	31	35	29	37	33

- 66 あなたは、戦後長年にわたるアメリカの支配下で、沖縄住民の自治能力と自治意識は高まったと思いますか。
- イ 高まったと思う。
- ロ 高まったとは思わない。
- ハ どちらともいえない。
- 67 あなたは、沖縄出身者が本土で働く場合、生活習慣や生活様式がちがうために、肩身のせまいおもいをすると思いますか。
- イ 肩身のせまいおもいをすると思う。
- ロ 肩身のせまいおもいはしないと思う。
- ハ どちらともいえない。
- 68 あなたは、沖縄の人が本土の人を結婚の相手として選ぶ場合に、沖縄の人であるという理由で、反対されることが多いと思いますか。
- イ 反対されることが多いと思う。
- ロ 反対されることが多いとは思わない。
- ハ どちらともいえない。
- 69 あなたは、復帰後本土の社会保障制度により、沖縄の人々は貧困や病気から大方救済されていると思いますか。
- イ 救済されていると思う。
- ロ 救済されていると思わない。
- ハ どちらともいえない。
- 70 あなたは、復帰後、若い人たちがどんどん本土に出ていったため、家族がばらばらになったり、老人と子供だけになったりして、生活がしにくくなったと思いますか。
- イ 生活がしにくくなったと思う。
- ロ 生活がしにくくなったとは思わない。
- ハ どちらともいえない。
- 71 あなたは、戦後食品衛生の水準が高まったり、伝染病が減ったのは、アメリカの公衆衛生の施策による影響が大きかったと思いますか。
- イ その影響が大きかったと思う。
- ロ その影響はなかったと思う。
- ハ どちらともいえない。

S. 47			S. 57		
一 般			一 般		
男	女	計	男	女	計
72	67	70	64	53	58
11	11	11	15	17	16
17	22	19	20	31	26
40	51	45	43	44	44
45	36	41	41	38	39
16	13	14	16	18	17
21	31	25	26	35	31
59	51	55	53	42	47
20	18	19	21	22	22
52	47	50	66	55	60
18	27	22	18	22	20
30	26	28	16	23	19
37	41	39	28	25	26
40	34	37	51	46	48
23	25	24	22	29	26
64	64	64	62	56	59
15	18	16	19	14	16
22	18	20	19	30	25



72 あなたは、戦後沖縄で犯罪や青少年の非行がふえたのは、長年の異民族支配がその主な原因になっていると思います。

- イ 原因になっていると思う。
- ロ 原因になっているとは思わない。
- ハ どちらともいえない。

73 あなたは、復帰の時点で沖縄の人々が抱いていたさまざまな不安はどうなったと思いますか。

- イ ほとんどがとりこし苦勞であったと思う。
- ロ ほとんどが現実になっていると思う。
- ハ どちらともいえない。

S. 47                      S. 57

一 般			一 般		
男	女	計	男	女	計
49	57	53	28	24	26
29	24	27	49	45	47
22	19	21	23	32	27
			30	27	28
			38	33	35
			32	40	36

【付表】マス・コミ接触度

	0 不明	1 毎日	2 時々	3 めったにない
新 聞	66* ( 7.2)	741 (80.3)	67 ( 7.3)	49 ( 5.3)
TV <sub>1</sub> ニュース・時事解説	70 ( 7.6)	535 (58.0)	293 (31.7)	25 ( 2.7)
TV <sub>2</sub> テレビドラマ	103 (11.2)	199 (21.6)	473 (51.2)	148 (16.0)
TV <sub>3</sub> スポーツ・音楽・クイズ等	110 (11.9)	237 (25.7)	491 (53.2)	85 ( 9.2)
ラ ジ オ	48 ( 5.2)	174 (18.9)	422 (45.7)	279 (30.2)

\* ( ) 外は人数,  
( ) 内は%を示す。

参 考 文 献

与那嶺松助, 他 復帰不安の研究: ~沖縄の施政権返還をめぐる~  
『与那嶺松助教授記念論文集』  
琉球大学心理学教室編 1981年11月(北大路書房)